

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―七

史跡・名勝 嵐山

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、（仮称）二尊院門前往生院町計画に伴う史跡・名勝嵐山の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

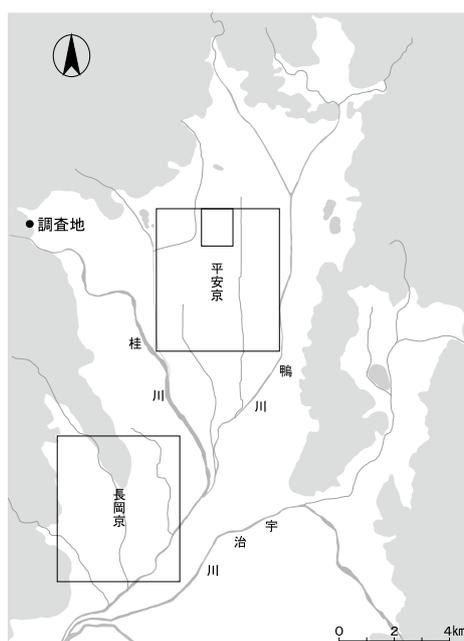
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成24年10月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨二尊院門前往生院町
- 3 委 託 者 株式会社ゼロ・コーポレーション
- 4 調査期間 2012年6月12日～2012年8月1日
- 5 調査面積 765.3㎡
- 6 調査担当者 東 洋一・辻 裕司
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「小倉山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 東 洋一
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と歴史的環境	4
3. 遺 構	7
(1) 遺構の概要	7
(2) D・K区	8
(3) J西・J中央区	10
(4) F・J東区	11
(5) A～C・E区	12
(6) G～I区	12
4. 遺 物	13
(1) 遺物の概要	13
(2) 土器類	13
(3) 瓦類	15
5. ま と め	21

図 版 目 次

図版1	遺構	D区遺構実測図（1：150）
図版2	遺構	K区遺構実測図（1：150）
図版3	遺構	J西区遺構実測図（1：150）
図版4	遺構	J中央区遺構実測図（1：150）
図版5	遺構	F・J東区遺構実測図（1：150）
図版6	遺構	A・B・C区遺構実測図（1：150）
図版7	遺構	E・G・H・I区遺構実測図（1：150）
図版8	遺構	1 A区全景（南西から） 2 B区全景（南西から） 3 C区全景（東から） 4 D区全景（北西から）
図版9	遺構	1 D拡張区全景（北西から） 2 D区雨落溝220（東から）

- 図版10 遺構 1 E区全景（北東から）
 2 F区北半（西から）
 3 F区南半（南から）
- 図版11 遺構 1 G区全景（西から）
 2 H区全景（南から）
 3 I区全景（北から）
 4 J西区全景（西から）
- 図版12 遺構 1 J中央区全景（東から）
 2 J西区北壁庭石検出状況（南から）
 3 J東区・F区路面181検出状況（南から）
- 図版13 遺構 1 K区全景（南から）
 2 K区西壁断割部落込み312（南から）
 3 K区北東隅雨落溝15延石・瓦検出状況（北西から）
 4 K区雨落溝15断割部延石・瓦検出状況（南西から）
 5 K区雨落溝15断割部延石検出状況（東から）
- 図版14 遺物 K区落込み312出土土器
- 図版15 遺物 J中央区土坑106・土器溜308出土土器、雨落溝出土瓦類
- 図版16 遺物 雨落溝出土瓦類

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（南東から）	3
図4	K区作業風景（南から）	3
図5	香巖院・足利家系図	4
図6	『山城國嵯峨諸寺応永鈞命絵図』	5
図7	D・K区遺構配置図（1：200）	9
図8	K区雨落溝15北東部平面図（1：30）	10
図9	J中央区南壁断面図（1：50）	11
図10	J中央区南壁土器溜308（北から）	11
図11	土器実測図（1：4）	14
図12	軒平瓦の瓦当部の接合方法	15

図13	瓦類拓影・実測図1（1：4）	16
図14	瓦類拓影・実測図2（1：4）	18
図15	瓦類拓影・実測図3（1：4）	19
図16	嵯峨条里と愛宕参詣道（1：20,000）	22

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	主要遺構一覧表	8
表3	遺物概要表	13

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

史跡・名勝嵐山指定地内に分譲住宅が計画されたため、平成24年6月12日から平成24年8月1日まで、京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文化財保護課」という。）および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）の指導の下に、遺構確認調査を実施した。

調査地は東西に長く、調査区をA区からK区まで、11区に分けて設定した。分譲地の埋設本管が計画されているJ区は、西部・中央部・東部に分割して調査区を設定した。G・H区は、調査地東の現愛宕道に面して現存する石垣の構築時期を確認するために設けた。A～F・I区は、分譲宅地から本管に通ず枝管の計画されている箇所である。

D区とK区から多量の焼け瓦・埴・焼土で埋まった溝を検出したので、府文化財保護課および市文化財保護課の指導の下にD区を拡張し調査した。その結果、東西18m、南北16mの瓦葺建物の四面に巡らせた雨落溝であることが明らかになった。その一部の断割を実施したところ、K区東側雨落溝北東隅で検出していた南北方向に並ぶ花崗岩製延石の延長部分を検出した。このことにより建物正面となる東側は、縁石が全面に据えてあった可能性が高くなった。この延石上には焼土



図1 調査位置図（1：2,500）

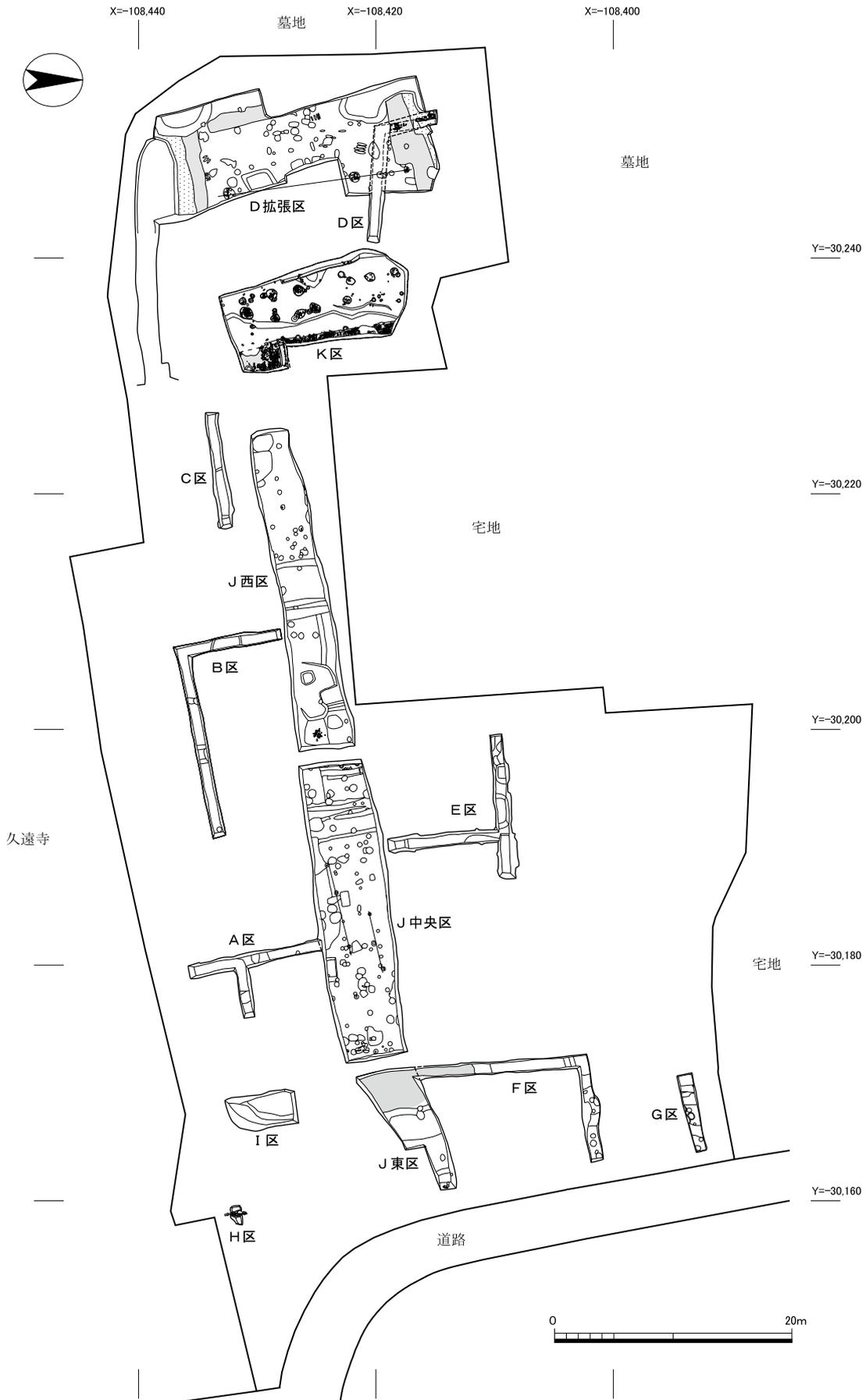


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景（南東から）



図4 K区作業風景（南から）

と焼け瓦が厚く堆積していた。

また、K区以東で平均厚さ0.4m以上ある室町時代の黄褐色砂泥の盛土を検出し、その直下に路面を含む鎌倉時代の遺構を多数検出した。

遺構が保存されることとなったため、遺構面を砂で覆い保存処置を施した。

なお、平成24年7月21日に近隣住民対象の現地説明会を開催し、41名の参加があった。

2. 位置と歴史的環境

調査地は嵯峨野小倉山麓の嵯峨清凉寺西門より西に延びる道路の正面に位置する。この道路は調査地前面で北に曲がり、鳥居本を経て愛宕神社に至る道路で、古くより参拝道となっている。調査地南には二尊院と戦後に移転してきた久遠寺が存在する。図6は応永三十三年（1426）、室町幕府四代將軍足利義持が臨川寺住持の月溪中珊に作成させた『山城國嵯峨諸寺応永鈞命絵図』（天龍寺蔵）である。調査地は、この絵図の「香巖院」と書かれた場所に該当する。絵図にある香巖院東門の前には広場と常緑樹を植えた長方形の壇を描いており、寺格の高さが窺える。

香巖院は、二代將軍足利義詮の正室で、三代將軍義満の義母として明德三年（1392）に亡くなった、従一位、洪川幸子の香火所である。義満の兄とされる無窓国師の孫弟子に当たる栢庭清祖を開山とする¹⁾。第二代目院主には、義満の子で栢庭の弟子友山周師（足利尊満）が就任した。三代目は、義満の長男義持に殺された次男の義嗣の子で、友山の弟子でもある修山清謹が就任した（『蔭涼軒日録』長祿二年（1458）十二月十八日条）。また、『蔭涼軒日録』文正元年（1466）四月十六日条に修山が退院する際に「香巖院御相続、代々以公方様御親族被定。仍与伊勢守先評之伺以烏丸殿若公被定申也。」とあるように、香巖院院主は將軍家から出すことが定まっていた²⁾（図5）。ここにいう四代目院主となる「烏丸殿若公」は八代將軍足利義政の猶子となった日野資任の子とされているが、文明十五年（1483）三月二十四日に義政の猶子「香巖院殿、同山等賢、十九歳、御他界」（『元親日記』等、『大日本史料・八編・十五冊』東京大学史料編纂所）とあり、この人物が五代目院主を継いだ可能性がある。なお、応仁・文明の乱前に香巖院に入寺し、清久と名乗り、兄義政の要請によって還俗して、長祿元年（1457）に堀越公方として伊豆に下った足利政知がいる。その後、政知の子が「香巖院新主戌刻入洛、御伴衆三百人許云々」（『蔭涼軒日録』文明十九年（1487）五月二十八日条）とあるように、義政の猶子となって十一代將軍足利義澄になる旭山清晃が伊豆から上洛して香巖院を継ぎ、彼は「香巖院御喝食御所」と呼ばれた³⁾。しかし、天龍寺が天文十九年（1550）に「夢窓疎石二百回忌」に向けて、夢窓国師派諸寺院を書き上げた天龍寺『奉加帳』（原田正俊編『天龍寺文書の研究』2011年収録）の中に香巖院の名前は既がない。明応二年（1493）の政変によって日野富子と管領細川政元に担ぎ上げられて十一代將軍となったが、永正五年（1508）に前將軍足

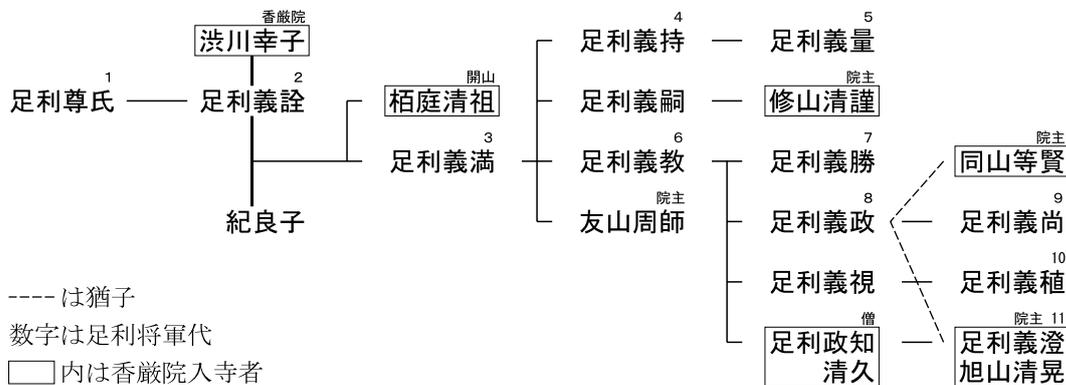


図5 香巖院・足利家系図

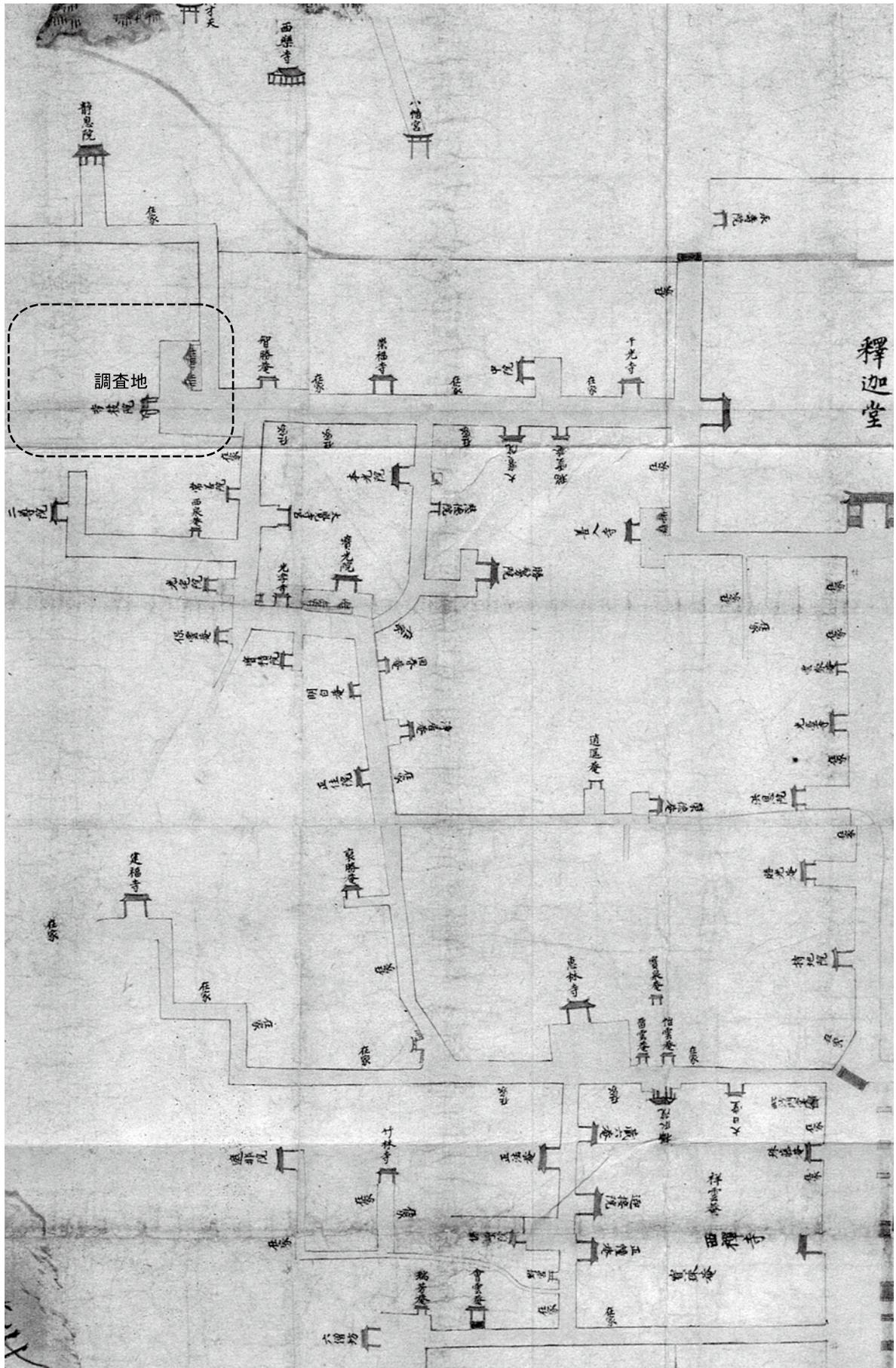


図6 『山城國嵯峨諸寺応永鈞命絵図』
 (部分、天龍寺蔵、東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影二 近畿一』より複写、加筆)

利義材に敗れて近江に敗走し、永正八年（1511）朽木で病死した義澄の敗北期を境にして香巖院の記録が途絶えている。このことから、義澄の敗走を契機に廃絶した可能性が高い。⁴⁾

今回検出した雨落溝の巡る瓦葺建物は、この香巖院に伴うものであると考えられる。

なお、香巖院前の愛宕山参詣道東側は醍醐天皇の第四子である中務卿兼明親王の別荘（雄倉殿）や藤原定家等の別荘（小倉山荘）に比定されており、平安時代からの愛宕山信仰の高まりと共に上嵯峨でも開発が進んでいた可能性がある。

註

- 1) 香巖院の概要については、藤木英雄『蔭涼軒日録』（株式会社そしえて、1987年）に詳しいが、文献で確実に香巖院が建立されていることが判明するのは、五代將軍義量時代からである。彼は將軍に就任する前の応永二十八年（1421）から亡くなる前年の応永三十一年（1424）まで毎年「嵯峨香巖院」に参拝している（『花宮三代』（『群書類従26』続群書類従完成会、1932年収録）。なお、香巖院に関しては近年、川本慎自「室町期における將軍一門香火所と大徳寺養徳院」『古代中世の政治と権力』吉川弘文館、2006年。原田正俊「京都五山禅林の景観と機能」『中世寺院 暴力と景観』高志書院、2007年。細川武稔『京都の寺社と室町幕府』吉川弘文館、2010年などが言及している。また、香巖院開山が庭清であることは『扶桑五山記』（玉村竹二校訂、鎌倉市教育委員会、1963年）による。以下『蔭涼軒日録』からの引用は『増補・続史料大成』本第21～25巻による。
- 2) 禅宗寺院は、將軍家子弟の最高教育機関の場でもあり、將軍家の家督争いを避けるために他の兄弟を出家・入寺させ院主とし、必要となれば還俗させて足利將軍に据える血脈プールとして機能していた（小和田哲夫『戦国武将を育てた禅僧たち』新潮社、2007年参照）。香巖院寺領として越中国佐美郷、美濃国大井郷、播磨国甘地郷、伊勢若松荘（註1）などが判明している。
- 3) 江戸時代中期寛延四年（1747）に森幸安が作成した『城西嵯峨松尾地図』（国立公文書館蔵）では「香巖院御所ノ跡」として藤原定家の小倉山荘跡東に比定しているが、実態は不明である。いずれにせよ江戸時代中期まで香巖院の存在が伝承によって知られていたことを示す。
- 4) 延徳二年（1490）四月二十七日に香巖院喝食御所に日野富子から譲られた小川第を足利材視・將軍義植親子方は「破却」したが、明応二年（1493）二月二十四日の変政によって喝食から十一代將軍となった義澄・富子方も通玄寺等の前將軍義植関係の寺院・邸宅を破却している（『政家記』延徳二年（1490）五月十八条、『北野社家日記』延徳四年（1492）正月二十二日条等、今谷明「足利義植」『中世奇人列伝』草思社、2001年）。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

調査地は、西側が高く、東へ向かって下がる傾斜地である。基本層序は、雨落溝を検出した西部と香厳院建立以前の遺構を検出した東部・中央部では様相が異なる。雨落溝を検出した西部の遺構検出面は、現地表から-0.5mの地山直上まで近世の竹栽培のために入れられた、にぶい黄褐色泥土の盛土と現代盛土からなるD区と、鎌倉時代の遺物を多量に含む落込み312を埋め立て、東側がなだらかに下がるK区からなる。検出した遺構面上面は特にD区で重機の爪痕が明瞭に残っており、建物跡は削平を受けている可能性が高い。

J区は地表下-0.4mまでが近代から現代の盛土で、その下に厚い黄褐色系盛土が約0.3m以上堆積している。この盛土は東に向かって厚くなる傾向がある。上面に成立する遺構は、時期不明のJ東区で検出した溝180とJ中央区西端で検出した南北方向の柱列1以外に明確な遺構はなく、上面は近代以降の削平を受けているものと思われる。盛土は、その堆積状況から西から順に斜めに盛っており、その途中の段階で土器溜308(図9・10)をJ中央区南壁で検出した。このことにより黄褐色系盛土の年代は15世紀前半を遡らないことが判明した。また、J西区でこの黄褐色系盛土に焼け瓦が含まれていたのでK・D区で検出した瓦葺建物の焼亡以降に盛られた可能性が高くなった。その盛土下に鎌倉時代から香厳院建立以前の遺構検出面が存在するが、J西区東半からJ中央区東端までの間には0.1~0.2mの土壌化した暗褐色系の整地土が带状に堆積している。この堆積層上面に成立する遺構はほとんどなく、礎石なども一切検出していない。この暗褐色系層については、15世紀前半以前の整地土であることから香厳院創建時の整地土層の可能性はある。しかし、この带状の層はJ中央区南端で下がり途切れており、路面181を検出したJ東区では検出していないので、J中央区東端とJ東区西端の間が路面と香厳院敷地との境界であろうと考えられる。な

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
鎌倉時代～ 室町時代前期	F区 : 路面181 J西区 : 溝280、土坑252・255 J中央区 : 柱列2(礎石80・93・113)、柱列3(礎石101・105・112・153)、石列40・43、 溝152、土坑106、 J東区 : 溝180、路面181 K区 : 落込み312
室町時代	D区 : 雨落溝220・240・241 J中央区 : 土器溜308 K区 : 雨落溝15
時期不明	D区 : 土坑195・200・203・302、礎石315 F区 : 溝192、土坑187 G区 : 溝168~170・173 J中央区 : 柱列1(柱穴162・309~311) K区 : 土坑2~5・7~12・17・26、柱穴21、礎石313・314

表2 主要遺構一覧表

遺構	調査区	規模(cm)	土色	遺構	調査区	規模(cm)	土色
土坑2	K区	φ60	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	溝168	G区	140×110	10YR5/6黄褐色砂泥
土坑3	K区	φ70	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	溝169	G区	30×110	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
土坑4	K区	50×65	10YR4/4褐色砂泥	溝170	G区	80×110	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
土坑5	K区	φ70	10YR4/4褐色砂泥	溝173	G区	80×110	10YR5/6黄褐色砂泥
土坑7	K区	60×80	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	溝180	J東区	230×420	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
土坑8	K区	φ80	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	路面181	F・J東区	330×950	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
土坑9	K区	φ70	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	土坑187	F区	φ60	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
土坑10	K区	φ80	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	溝192	F区	110×80	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
土坑11	K区	φ80	10YR3/3暗褐色砂泥	土坑195	D拡張区	φ50	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
土坑12	K区	φ100	10YR4/4褐色砂泥	土坑200	D拡張区	φ45	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
雨落溝15	K区	70×1000	10YR6/4にぶい黄褐色砂泥	土坑203	D拡張区	φ60	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
土坑17	K区	60×80	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	雨落溝220	D拡張区	180×500	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
柱穴21	K区	φ40	10YR4/4褐色砂泥	雨落溝240	D拡張区	300×80	10YR4/2灰黄褐色砂泥
土坑26	K区	φ55	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	雨落溝241	D拡張区	70×400	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
石列40	J中央区	30×80	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	土坑252	J西区	220×200	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
石列43	J中央区	30×100	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	土坑255	J西区	250×140	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
礎石80	J中央区	φ35	10YR4/4褐色砂泥	溝280	J西区	80×370	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
礎石93	J中央区	φ40	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	土坑302	D拡張区	φ60	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
礎石101	J中央区	φ30	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥	土器溜308	J中央区	80×?	10YR6/3にぶい黄褐色砂泥
礎石105	J中央区	φ20	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	柱穴309	J中央区	25×40	10YR5/6黄褐色砂泥
土坑106	J中央区	φ100	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	柱穴310	J中央区	30×40	10YR5/6黄褐色砂泥
礎石112	J中央区	φ30	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	柱穴311	J中央区	20×40	10YR5/6黄褐色砂泥
礎石113	J中央区	φ30	10YR4/4褐色砂泥	落込み312	K区	30×650	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
溝152	J中央区	50×320	10YR5/4にぶい黄褐色砂泥	礎石313	K区	35×45	10YR4/4褐色砂泥
礎石153	J中央区	φ40	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	礎石314	K区	25×25	
柱穴162	J中央区	φ40	10YR5/3にぶい黄褐色砂泥	礎石315	D拡張区	30×20	

お、J中央区の中央南壁に設けたテスト掘削で遺構面下に礎石を伴う下層遺構面がもう1面存在することを確認している。枝管が計画されている調査対象地はJ区西端南に設けたC区を除いて暗褐色系堆積層まで達していない。なお、遺構確認調査の性格上、各遺構を掘り下げていないので、その性格や時期が不明なものが多いことを断っておきたい。

(2) D・K区 (図版1・2・8・9・13)

雨落溝15・220・240・241 (図版9・13、図7・8) K区とD区・D拡張区で検出した。瓦葺建物の四周を巡る雨落溝と考える。溝内に焼け瓦と焼土が詰まっていた。

K区では調査区東壁に沿って東側雨落溝15を南北13m以上検出した。溝幅は、断割によって2m以上、残存深さ0.3mであることが判明した。西肩部から長さ約0.8mの花崗岩製延石をK区北壁わきより4石検出したが、一部欠落や移動・割れがある。延石上面には約1m間隔で径4cm・深さ2cmの柄穴を穿っている。延石の上に焼け瓦・焼土が被さっていた。南部でも焼け瓦・焼土に混じった延石の残骸と、南部に設けた雨落溝断割によって、北部で検出した延石から6m南の延長線上で延石を検出した。断割の結果、断面17cm四方の延石が、地山直上に南北方向に並べて据えられていた。この延石上部にも柄穴が穿たれており、そこで2つに割れていた。通常この様な柄穴は、上に乗せる石材もしくは木材を固定するために穿たれるもので、上に乗せられていた材が失われているものであろう。

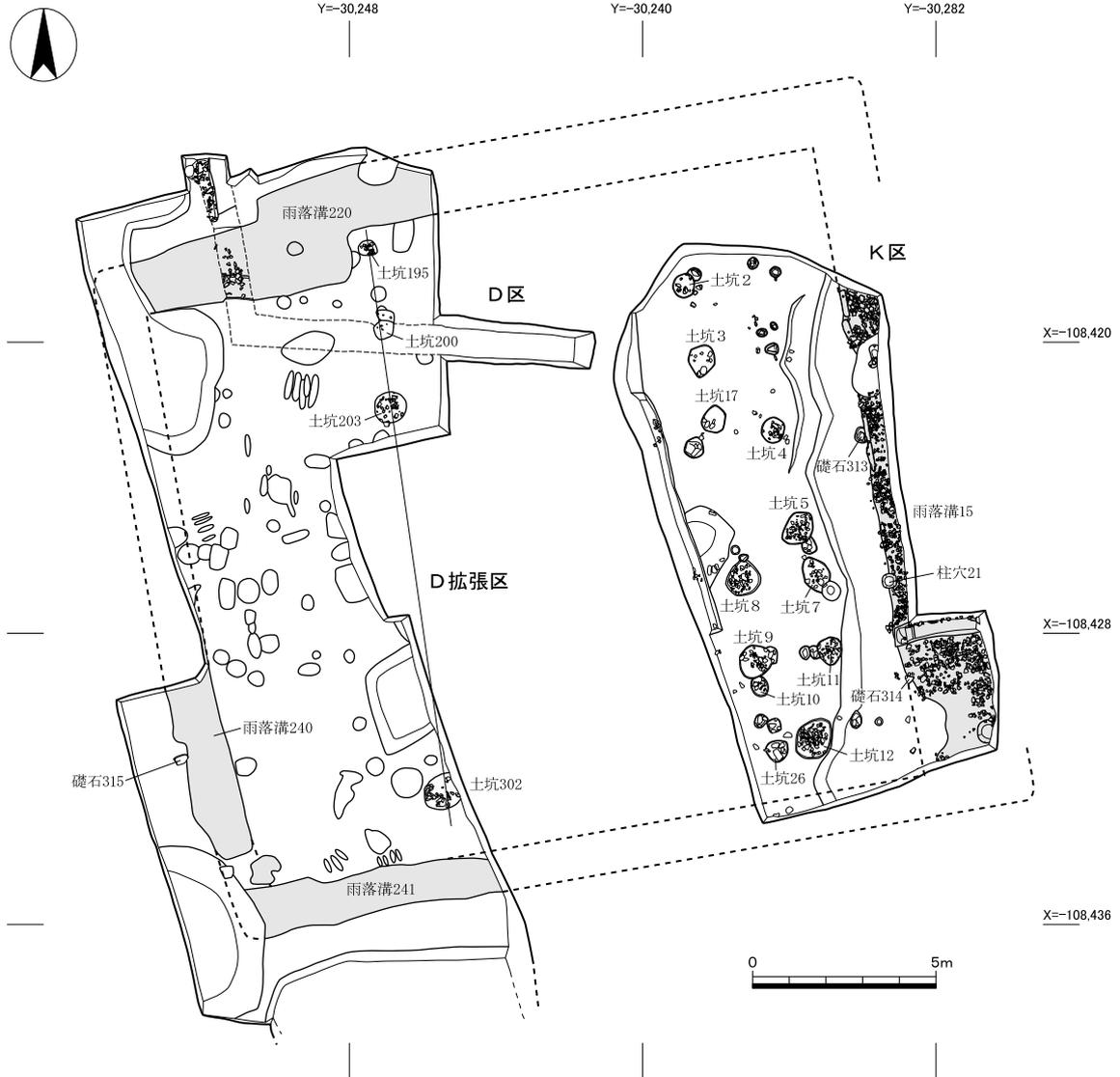


図7 D・K区遺構配置図（1：200）

D区およびD拡張区では北部で北側雨落溝220、西部で西側雨落溝240、南部で南側雨落溝241の3面の雨落溝を検出した。ただし、延石は検出していない。

建物北端と考えられる雨落溝220は、幅1.5m、長さ8m、残存深0.3m分検出した。溝は西側で南に1m程屈曲し、さらに西に向かって続いていた。また、溝の北側にも焼け瓦の散布が広がっていた。

D拡張区西端では、幅1.3m、長さ5m、残存深0.3mの雨落溝240を検出したが、南端部は浅くなり消滅していた。

D拡張区南部で南側雨落溝241を幅1.3m、長さ6.5m、残存深0.3m検出した。しかし、現代の削平をかなり受けており西側は浅い。また、溝の南側は北側と同じく瓦の散布が広がっていた。それより南はすべて現代の攪乱であった。

土坑195・200・203・302（図7） D区の雨落溝220の段差部分から南北方向に7尺（2.1m）間隔で復元できる。東西を隔てる間仕切りの柱列の可能性はある。埋土中に焼け瓦が入っていたの

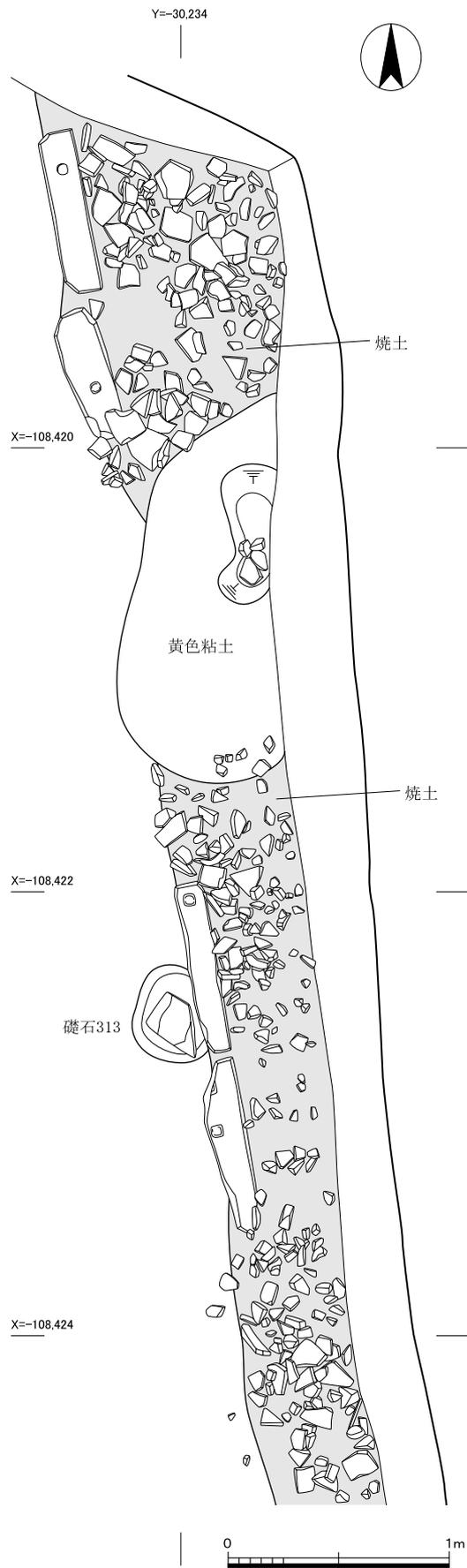


図8 K区雨落溝15北東部平面図(1:30)

で、礎石の抜き取り跡の可能性はある。

土坑2・5・7・12・17・26(図7) K区では焼け瓦・石が多量に入った径1m前後の土坑とした遺構群がある。これらは、建物の焼亡後に礎石を抜き取った穴の可能性はある。南北方向に2列に並ぶように見えたので復元を試みたが、雨落溝15で検出した延石列との緊密な平行関係がなく、柱間が揃わず、復元には至らなかった。

礎石313～315・柱穴21 K区の礎石313、柱穴21、礎石314は雨落溝15と延石に並行して内側に南北に並ぶ。D区の礎石315は雨落溝を越えて据えられていることから、再建時の礎石の可能性はある。また、断割で検出した延石の1m南で礎石314が遺構検出面に据えられており、この礎石下に延石が埋まっている可能性がある。

落込み312(図版13) K区の西壁北端では、近世盛土直下が地山面となるが、ここより南方向と東方向に落込みを認めたので、西壁わきにサブトレンチを設け、地山まで断ち割った。その結果、建物跡は深さ0.7mの落込みの上に土を盛って整地していたことが判明した。落込み底の地山直上から鎌倉時代最末期の遺物が出土した。

(3) J西・J中央区(図版3・4・11・12)

J区は全体に東に向かって向かってなだらかに下がる。

J西区では鎌倉時代から室町時代前期と考えられる遺構面で溝・土坑・柱穴などを多数検出している。南北方向の溝280から13世紀前半の軒瓦2個体が出土した。また、長軸2m前後の土坑255・252などを西端と南端で検出しているが、性格は不明である。

J西区西半の北壁で、地山直上に黄褐色系の盛土が被さった幅1m・高さ0.3mの庭石状の平坦な石を検出した(図版12)。北壁断面図(図版3)

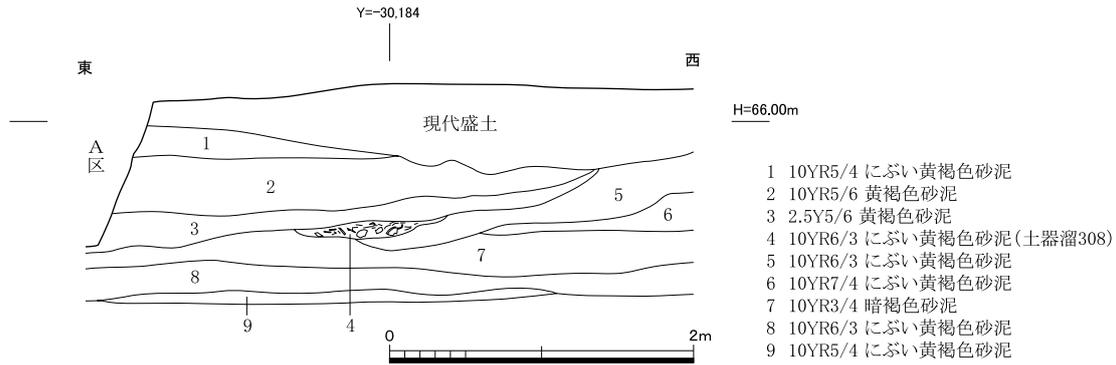


図9 J 中央区南壁断面図 (1 : 50)

にあるように、石の東側が積み土によって盛り上がり、中央付近で下がっている。また、中央部の下がりに沿って暗褐色系の堆積層が東に堆積している。このことから石が据えられた時期は黄褐色系盛土の前で、香厳院と同時期か、それ以前のK区西壁断割部で検出した落込み312の時期に該当する可能性がある。ただし、この盛り上がりは南壁にはみられなかった。J中央区からも鎌倉時代の遺構面から溝・土坑・柱穴を多数検出している。



図10 J 中央区南壁土器溜308 (北から)

J 中央区の西壁に沿って約1.2m間隔で、黄褐色系の盛土を掘り込んだ柱穴309・162・310・311からなる柱列1が南北方向に並ぶ。柵などの土地の区画を示していると考え。時期は不明である。

J 中央区の中央部では、北柱列が東から順に礎石80・93・113からなる柱列2と、南列が礎石101・105・112・153からなる柱列3がある。東西方向に礎石と考えられる2.2mの間隔がある2列の石列が、平行して2.2m等間で、東で北へ13.5°振れて並ぶ。しかし、調査区幅が狭いため建物規模などは確定できない。また、南列の東延長0.5mで礎石を検出している。

また、J 中央区の西端と東端で南北方向に並ぶ石列40・43を検出している。西端の石列40は、幅0.5mの南北方向の溝152西肩上面で、5石面を東に揃える。また、東端の石列43は、疎らにしは並ばないが、石列東からJ西区から連続する暗褐色系の地層の上面で検出している。

径1mの土坑106は土器溜で、出土遺物から室町時代前期以前に比定できる。

土器溜308はJ中央区南壁で検出した(図9・10)。室町時代の土師器が出土している。

(4) F・J東区(図版5・10・12)

路面181(図版12) 愛宕道に面するJ東区と北に接するF区南半では、鎌倉時代から室町時代前期と考えられる遺物を包含する路面181を南北10m、東西3m分検出した。路面は径約2cm程の

砂利を用いて叩き締め、少なくとも3面あることを確認した。路面東は幅2mの南北方向の溝180で路面が途切れる。路面の南は調査区外となり、F区で検出した路面の北延長もF区北半の攪乱のため削平を受ける。溝180は東西両側の黄褐色系盛土上面で検出しており、遺物がないため判断は難しい。

F区北半からは東西溝や土坑・柱穴などを検出している。土坑187は焼土が埋まっていたが、年代などは不明である。南北方向の溝192はF区で検出した。F区の北半の愛宕道側は盛土が薄くなっており、地表下0.2mで遺構面となる。

(5) A～C・E区 (図版6～8・10)

A～C・E区は枝管計画対象地で、掘削深度が0.7mまでのため、鎌倉時代の遺構面まで達していない。しかし、E区攪乱壁面および試掘坑壁面では、J西・J中央区で検出した暗褐色系の整地土を確認している。

(6) G～I区 (図版7・11)

G区は愛宕道沿いの調査地北端に設けた。盛土は薄く、地表下0.1mで遺構面となる。南北方向の溝168～170・173などを検出したが、時期などは不明で、J東区南北溝180やF区南北溝192との関係も不明である。調査区南に沿って存在する石垣は、近代の堆積土上に形成されている。

調査地南端に道沿いのH区では、道側となる露出していた石垣の東に深さ0.7mの溝が掘られており、現代の砂で埋められたことが明らかとなった。また、石垣下と裏込め土も近代以降の堆積土であった。

I区では南西方向の落込みがあり、江戸時代の土師器皿が出土した。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土遺物はコンテナで35箱を数えるが、K・J区の雨落溝から表採した室町時代の瓦類が8割を占める。平瓦と丸瓦が大半を占め、塼がこれに次ぐ。その他、K・J区から鎌倉時代から室町時代にかけての土師器皿・瓦器椀・軒瓦・輸入白磁・輸入青磁などが出土している。

(2) 土器類 (図版14・15、図11)

K区落込み312出土土器 1～14はK区西壁断割で建物下層の落込み312底から出土した。香厳院建立前の鎌倉時代末期から室町時代初頭に位置づけられる時代の遺物群と考えられる。これらの遺物の半数がほぼ完形で出土した。実測不能なものに常滑・輸入黄釉褐彩盤・須恵器捏鉢などがある。

1・2は土師器へそ皿である。1は口径6.2cm、高さ1.9cmで、淡黄橙色である。ほぼ完形で出土した。2は口径6.8cm、高さ1.9cmで、1よりやや赤みを帯び、口径が広い。3～5は器高の低い土師器小皿である。横ナデで立ち上げる。3は口径8.4cm、高さ1.7cmで、鈍い橙色である。4は口径8.8cm、高さ1.5cmで、胎土が白い。5は口径8.3cm、高さ1.3cmで淡い橙色である。6～8は土師器皿である。白色系であるが、やや褐色化している。横ナデ調整で、端部を少しつまみ上げている。6は口径11.1cm、高さ2.9cmの完形である。7は口径11.4cm、高さ2.7cmである。8は口径11.2cm、高さ2.3cmで、外面腰部に粘土紐巻き上げの痕跡が左上がりに残る。1300年代以降のⅦ期中～新にかけての土師器群であろう。赤色系の土師器皿や小型のコースター型皿も出土しているが、実測できるものがなかった。

9～11は瓦器椀である。作りはやや歪みがあり、焼成は不良。内面に疎らなミガキがあるが、外面にはない。端部は横ナデで作るが、外反せずやや尖り気味に丸く収めている。9は完形で出土し

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代～ 室町時代前期	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器11点、瓦器4点、 施釉陶器2点、瓦類2点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器4点、瓦類18点		
時期不明	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、 金属製品				
合 計		41箱	41点 (6箱)	35箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

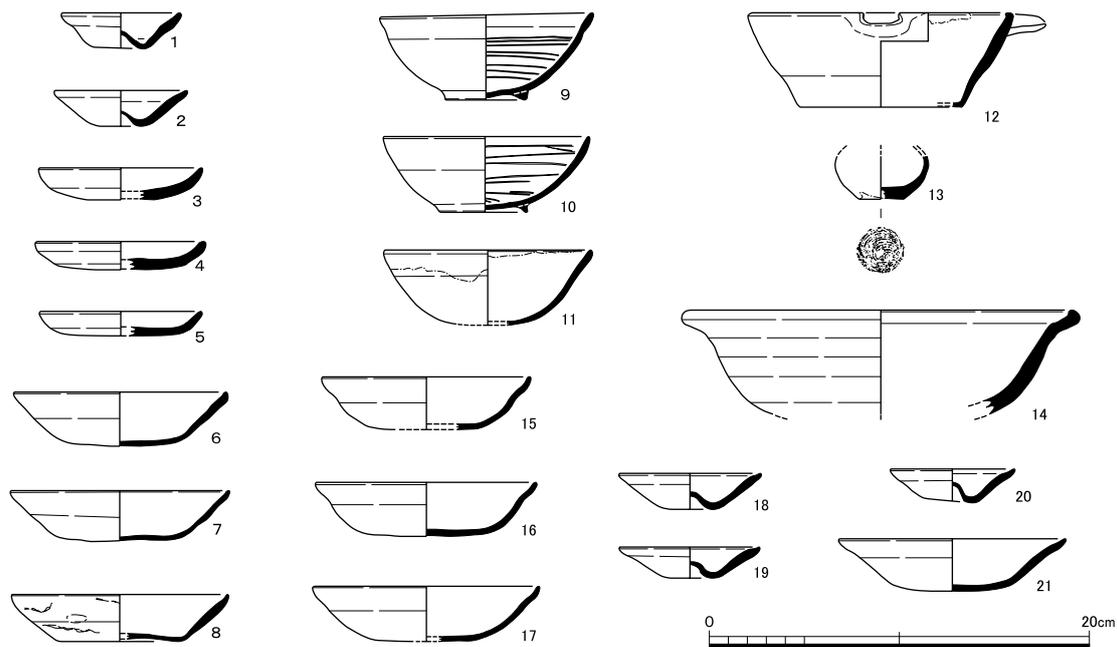


図11 土器実測図（1：4）

た。口径11cm、高さ4.6cmである。10もほぼ完形で出土し、口径10.7cm、高さ4.5cmである。11には高台がなく、口縁端部にのみ炭素が吸着している。ミガキの有無は器表が荒れているため確認できない。口径10.8cm、高さ4.0cmである。同時期の白色系土師器碗に類似している。12は瓦質の片口鍋である。内面・外面とも横ナデ調整。外面に煤が付着している。復元口径13.6cm、高さ5cmである。

13は美濃産の小型の茶入れである。上部が欠損しているが、肩部ですぼまる。底は平底で糸切り痕が残る。内面・外面に褐釉を施す。胎土は白くやや粗い。底中央に径0.2cm、深さ0.2cmほどの孔を開けるが、未貫通である。14は古瀬戸の鉢である。口径20cmで、体部下半を削る。高台部は欠損している。胴部高さは5.5cmである。内面と外面中位まで薄い緑色の灰釉を施す。口縁部は外反し、口縁内面に強いくびれを作り、端部を肥厚させ丸く収める。

J 中央区土坑106出土土器 15～17はJ中央区土坑106から出土した白色系土師器碗である。Ⅶ期古～中の土器群で1300年代前後に該当し、1～14の土器群より一段階古く、胎土もより白く薄い。15・16は口縁端部を横ナデで外反させている。15は口径10.9cm、高さ2.8cm。16は口径11.5cm、高さ2.9cm。17は口径11.8cm、高さ2.9cmである。赤色系土師皿も出土しているが実測できるものはない。

J 中央区土器溜308出土土器 18～21はJ中央区土器溜308から出土した。色調は浅黄橙色である。18～20はほぼ完形の土師器へそ皿である。18は口径7.4cm、高さ1.9cm。19は口径7.3cm、高さ1.6cm。20は口径6.5cm、高さ1.8cmである。21は復元口径11.9cm、高さ2.7cmで、白色系のやや褐色化した土師器皿である。横ナデによって外反させておりⅨ期中の特徴を持ち、15世紀半ばと考えている。

(3) 瓦類 (図版15・16、図12～14)

瓦類は平瓦と丸瓦が大半を占めており、比率的には塼が次ぐ。平瓦・丸瓦と少数の軒瓦との出土比率から本瓦葺塼敷建物があつたことが想定でき、半数の瓦が二次的な被熱によって赤く変色していることから火災に遭遇したものと思われる。また、瓦は小片が多く、火災後の整地に伴って溝に埋められた可能性がある。出土した平瓦凹面には無文の叩き棒によるタタキや横ナデなどを施しているため、制作過程の痕跡を窺うのは困難が伴うが、わずかに布目の痕跡がある平瓦がある。しかし、布目のある平瓦に対して、凹凸両面に糸切り痕と離れ砂の痕跡が窺える平瓦の方が量的に多い。凹面に布目が認められるものは軒平瓦に多いが、平瓦には10枚に1枚程度である。また、布目のある平瓦凹面に離れ砂の痕跡がほとんどみられないのに対し、布目のない平瓦には凹面の横ナデ・タタキ締めにもかかわらず離れ砂の痕跡が明瞭に窺える。なお、すべての平瓦凸面にはタタキやナデの痕跡はなく、糸切り痕や離れ砂が明瞭に付着している。

J 西区で検出した22・23を除く24～41はすべてJ・K区の雨落溝から出土した。

22・23はJ西区の溝280から出土したセット関係にある軒丸瓦と軒平瓦である。両瓦共に表面に炭素吸着し、胎土は粗く、長石を多く含む。棟もしくは築地塼などに使用されていたものと考えられる。22は「折り曲げ式」(図12)で作成され、中心飾りに放射状に7方に開く菊花風の花文を、左右に下向きの4本の剣頭文を配す剣頭文軒平瓦である。平瓦部凹面に布目が残し、2本の細い平行線のヘラ記号がある。瓦当面上縁に緩い面取りを施す。23は珠文を周囲に巡らす蓮華文軒丸瓦である。これらの瓦は常盤仲ノ町遺跡からほぼ同範のセットが出土しており、13世紀前半とされる¹⁾。

24～27の軒平瓦は「半截菊花唐草文」である。陽刻輪郭線で五葉の半截菊花文を中心飾りとし、左右に唐草文を3単位配している。すべて同規格の同範瓦で35点出土している。これらの軒平瓦は平瓦凸面の一方の狭端面を斜めに切り取り、そこに粘土を貼り付ける「瓦当貼り付け式」(図12)で、数点、瓦当部が斜めに剥離した状態の瓦当部を数点確認している。範の入りが深いのが特徴で、瓦当面外周から凹んだ文様面まで平均0.8mmの深さがある。この瓦当文様は足利氏所縁の鹿苑寺(金閣寺)北山殿・相国寺・天龍寺・臨川寺などから出土しているが、同範と認定できるものはなく、特に両端の唐草文が上に巻いているのが特徴である。瓦当上端には幅1.5cmほどの面取りを施している。顎後端にも幅の狭い面取りを施している。15世紀から始まるとされる瓦当下縁の面取りはなく、時期決定の参考になる²⁾。また、瓦当裏の平瓦接合部に凹型調整台の圧痕が付くものが多

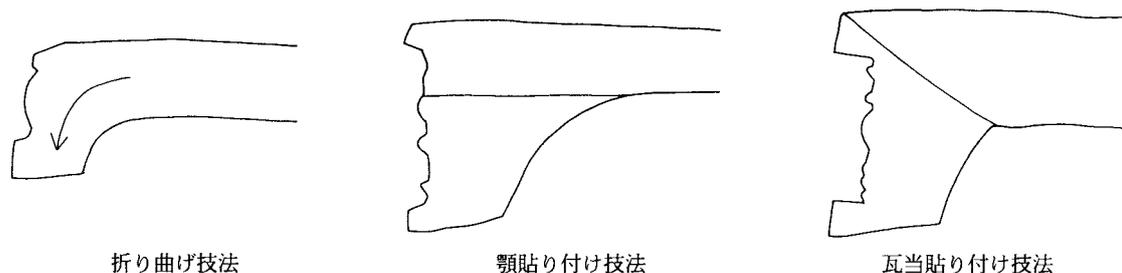


図12 軒平瓦の瓦当部の接合方法 (山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報 第59冊より)

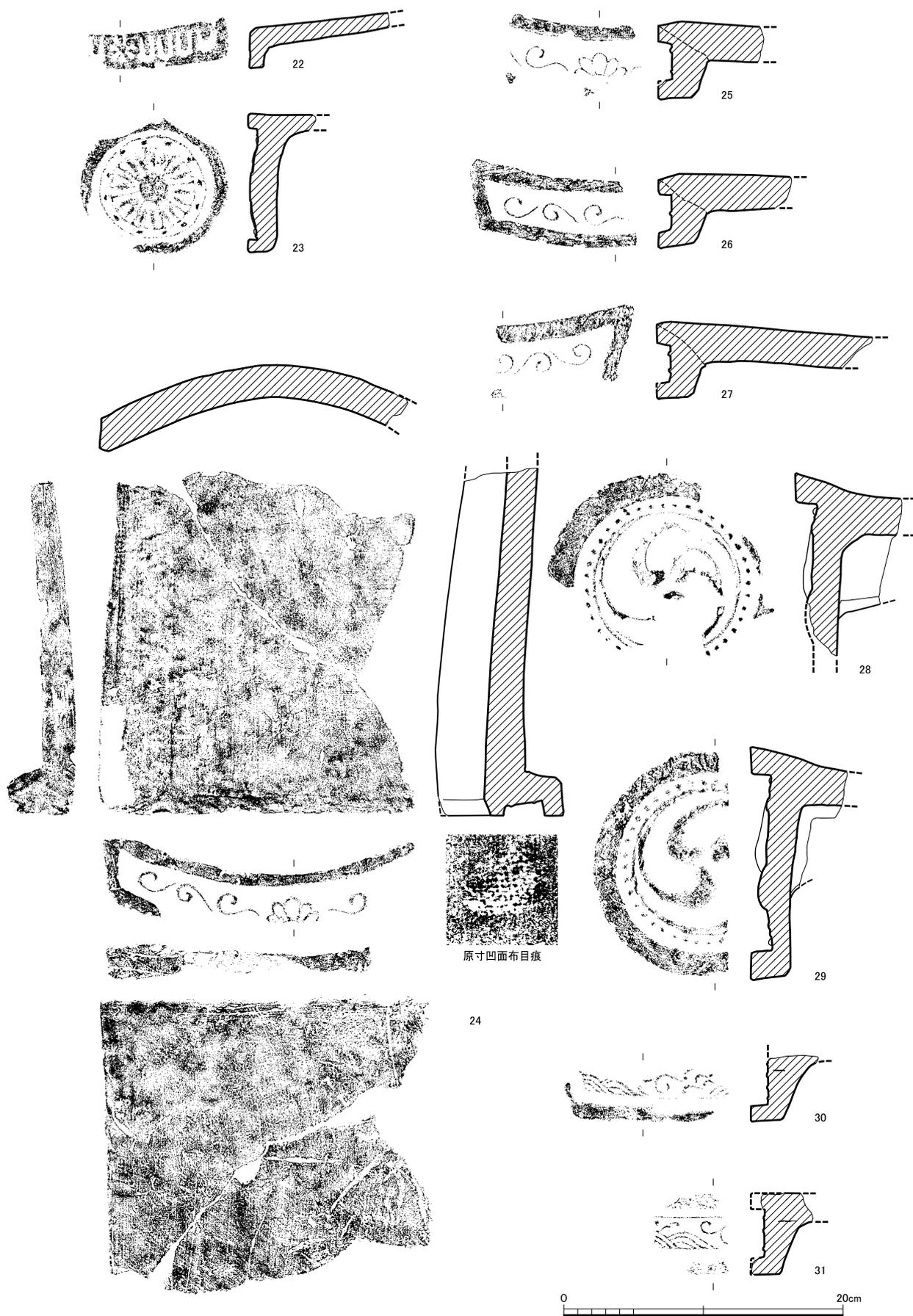


图13 瓦類拓影・実測図1 (1 : 4)

く、顎部の調整は横ケズリか横ナデで調整している。文様面に離れ砂もしくは乾燥粘土粉が付着しているものもあるが量は少ない。軒平瓦の平瓦部は後に述べる平瓦より調整が密であり、凹面は横ナデとタタキ、凸面は縦ナデによって丁寧に調整されている。しかし、かすかに凹面に布目を残すものも多い。また、瓦側面を垂直に切る際に生じたと考えられるバリ跡や凹型調整台に乗せた台の痕跡が、凸面と瓦当裏面の接合部に残存する。

28・29は半截菊花文軒瓦とセットとなる軒丸瓦で同文が35点出土している。左方向に巻き込む三巴文で周囲に細かい珠文を多数巡らせているのが特徴である。すべて同範の可能性が高く、文様部には離れ砂もしくは乾燥粘土粉が付着している。

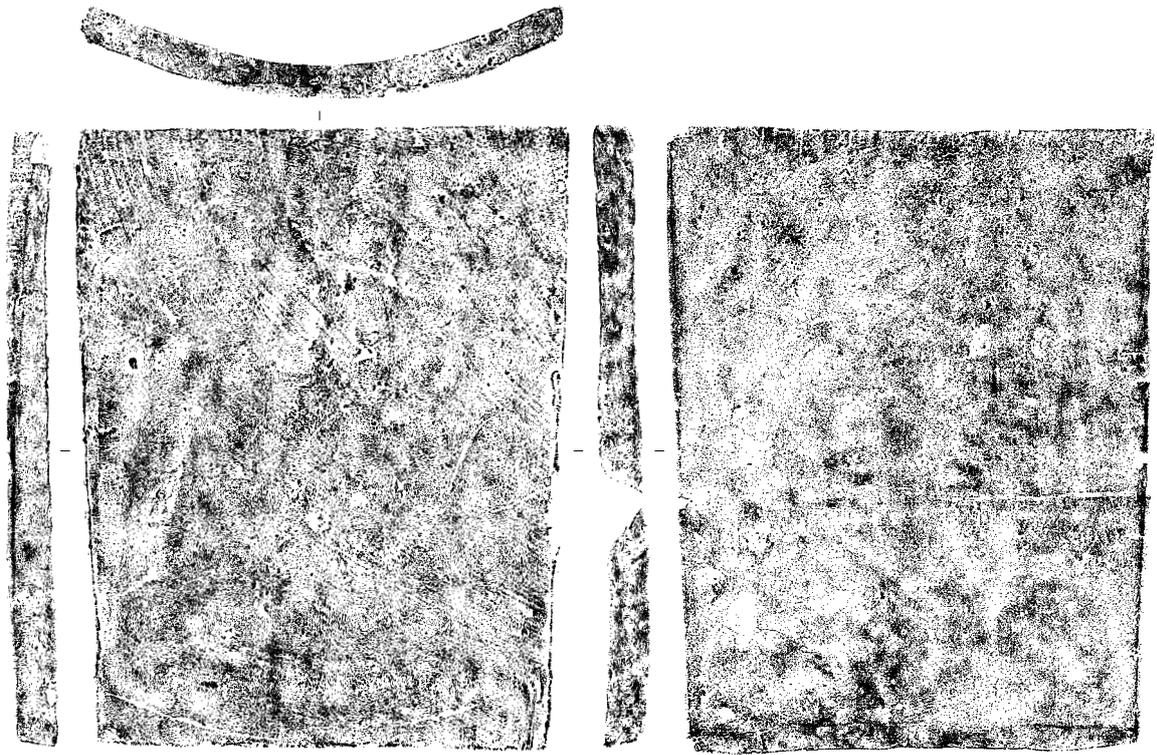
30・31は波状文を表わした段顎の軒平瓦で3点出土しているが、全体の文様などは不明である。胎土は暗灰色である。また瓦当上部を欠いているため製作技法も不明であるが、31の瓦当断面にカキ破りによる顎部接合痕を確認した。「顎貼り付け式」(図12)の可能性が高いが、凸面縁に範が食い込む部分だけ面取りして接合している可能性もあり、ここでは判定を保留したい。これらの瓦は火を受けておらず、後補か付近の寺院から混入した可能性もある³⁾。

32は今回検出した唯一の完形の平瓦である。焼成はやや不良であるが青灰色である。狭端面幅23cm、広端面25cm、長さ33cm、厚さ2cmを測る。凹面狭端面に幅1.5cmの面取りを施す。また、凹面両側縁はナデもしくは篋で丸く0.5cmほどの面取りを施している。凹凸両面に斜め右下がり方向の糸切り痕と離れ砂もしくは乾燥粘土粉が四周と面取り部分を除いて全面に付着している。ただし、凹面に関しては葺き足部分は横ナデによって大部分が消されている。また、凹面に幅5cmほどの粗い無文のタタキの痕跡がまばらに観察できるが、軒平瓦ほど顕著ではない。また、瓦側面を垂直に切る際に生じたと考えられるバリ跡が側面下に残存する。両面砂目で布目がないことから「凸型成形台積み重ね技法」によって制作されたものであろう。

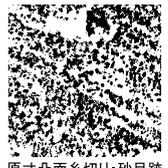
33は凹面に布目が付着する平瓦である。凹面に離れ砂がほとんどみられない以外には、上記の平瓦と異なる点はない。表面が剥離しているものを除いて大雑把な比率でしかいえないが、平瓦の約10枚に1枚程度の割合で布目が確認できる⁴⁾。この瓦も凸型台に布を敷く「凸型成形台積み重ね技法」によって制作されたものであろう。

34・35は丸瓦である。焼成は良好で青灰色である。幅15cm、高さ8cm、厚さ3cmである。玉縁部を欠いているが胴部長は31cmである。他個体の玉縁部の長さは5cmで内傾化している。14世紀中期に始まるとされる玉縁尻凹面面取りがあり、その部分にまで瓦衣の痕跡である布目が残存する。12世紀末に始まり、13世紀中期までが多いとされる凹面布目に横方向の破線状吊り紐痕の細かい凹みが4列存在する。凹面中央縦方向に瓦衣を外した後、ヘラ記号のような線が15cm尻方向に向かってきつく引かれている。凸面は玉縁付近の胴部に筵状のタタキ痕がわずかに残るが、その上から縦ナデで消されている。凹面の側面と頭の面取りは大きく削り取られている。

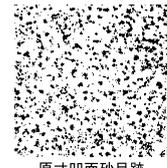
36・37は棟の天辺に葺かれる断面山状の伏間瓦である。厚さは側面で3cm、中央部が2cmである。焼成は良好で青灰色である。凹面には布目が明瞭に残る。凸面は丁寧なナデ調整である。両面とも離れ砂の付着はない。凹面の面取りは丸瓦に準ずる。36は頭部、37は尻部である。合計3点



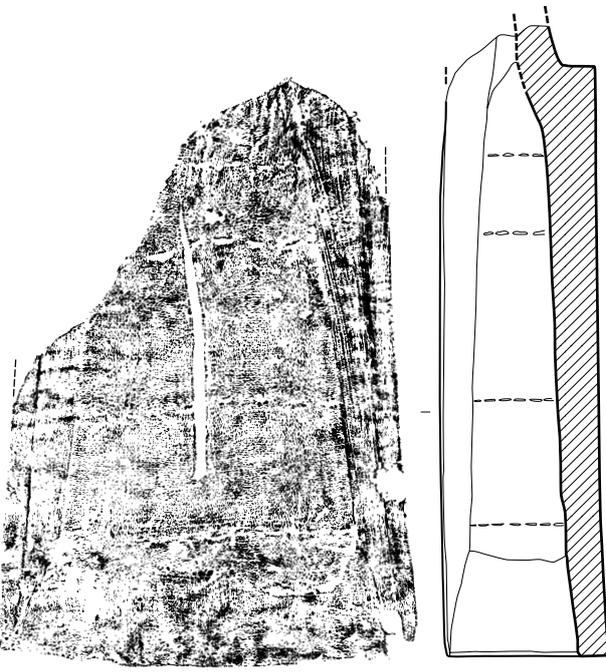
32



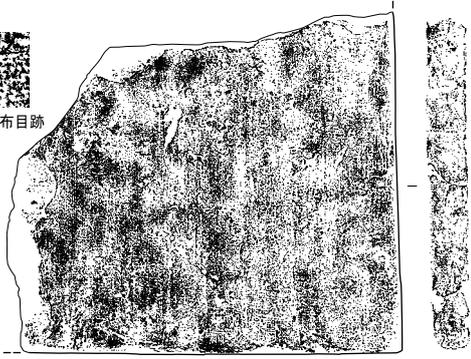
原寸凸面糸切り・砂目跡



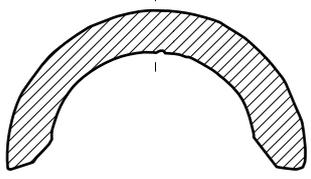
原寸凹面砂目跡



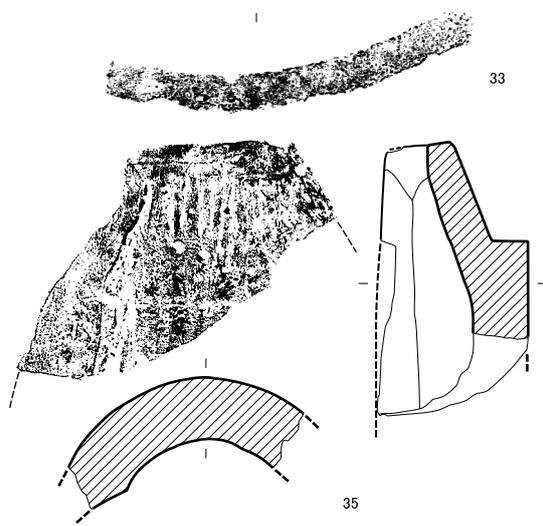
原寸凹面布目跡



33



34



35

图14 瓦類拓影・実測図2 (1 : 4)

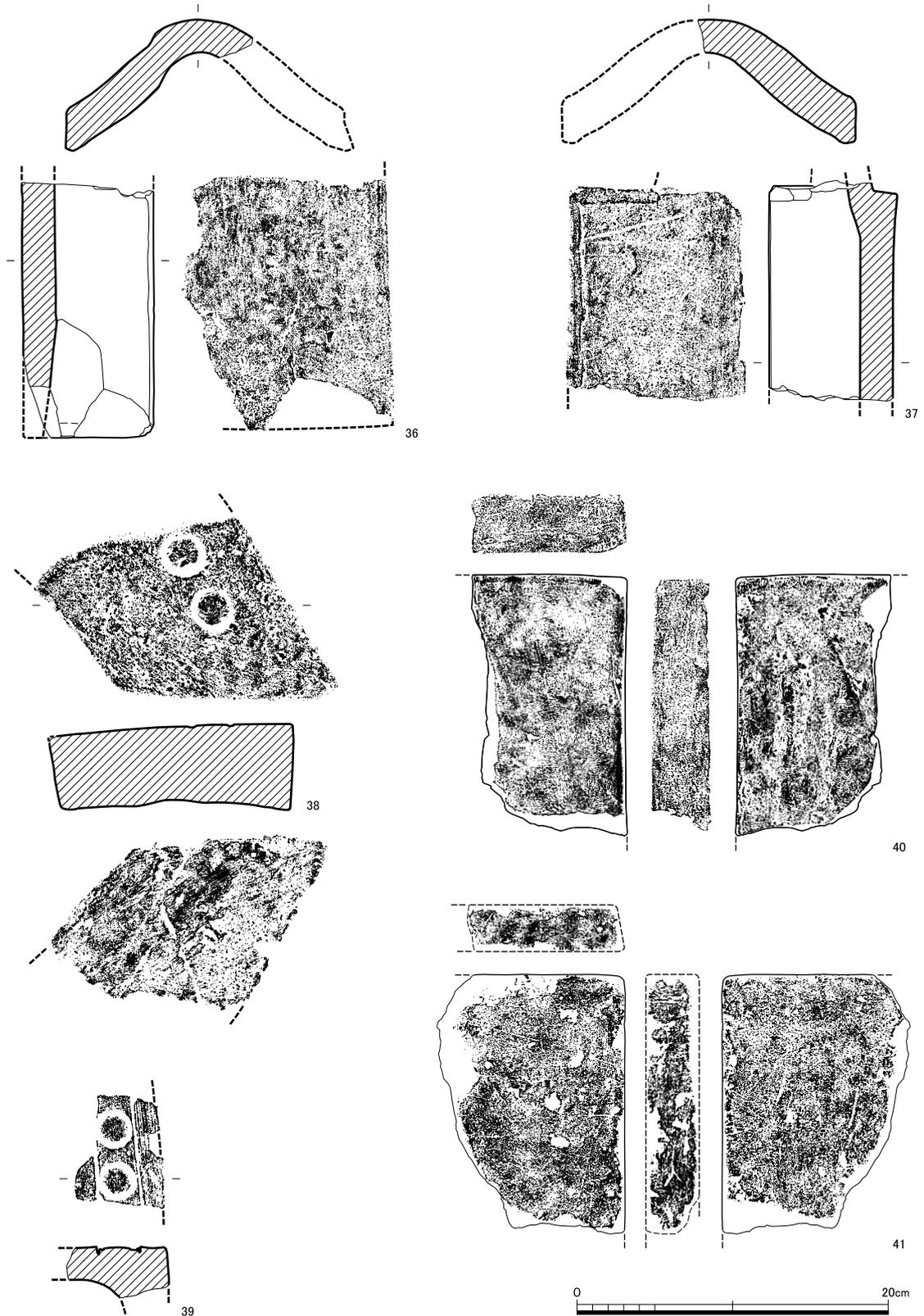


図15 瓦類拓影・実測図3 (1 : 4)

出土している。

38・39は鬼瓦周縁部で、竹管文を周囲に配する。38は径2.8cmの竹管文を施し、幅13cm、厚さ5cmあり、39と比較し大きい。鬼瓦の股先端部で棟端に置かれた可能性がある。表面に炭素が吸着し

ている。39は2本の篋で画された深い区画に接して径2.3cmの小さい竹管文をスタンプで押す。38と比較し小振りで、降棟もしくは隅棟に乗せられていたものであろう。二次焼成のため赤く変色している。裏面は指ナデで粗い。中心文様部は不明である。その他に鬼瓦は3点出土している。

40・41は床に敷かれた塼で合計24片出土している。厚さ3.5cmと3cmの2種類がある。破片のため幅などは不明であるが正方形であろう。表面と側面はナデ調整である。裏面は無調整で離れ砂が付着するが、1点布目が付着しているものがある。厚みのある40は堅く焼き締まっており青灰色である。41は焼成は不良で黄灰色である。

註

- 1) 13世紀中期～後期初頭の大覚寺所用瓦を遡る13世紀前半の指標瓦とされている。上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』古代学協会、1978年
- 2) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報 第59冊、奈良国立文化財研究所、2000年
- 3) この文様に類似した瓦に、播磨宝林寺出土「波状紋」軒平瓦がある。田中幸夫『播磨の中世寺院跡』私家本、1998年参照。同『播磨の中世瓦』私家本、2004年
- 4) 山崎信二氏は『瓦が語る日本史』（吉川弘文館、2012年、p3）の中で「古代においては凸型台上でカーブを作り出した凸型台一枚作りであったが、近世では凹型台一枚作りであり、中世においても凹型台一枚作りを先駆的に採用した例があったとする説（A説）と、凸型台上で一枚一枚叩き締めて四枚積み重ねる、凸型成形台積み重ね四枚作り技法を提唱する説（B説）があるが、西暦1300年前後の群馬県高崎市来迎寺・浜川北遺跡や神奈川県金沢文庫遺跡では、ほぼ四枚に一枚ほど凹面に布目があり、他の三枚ほどは布目がなく、凹面凸面の両方にハナレ砂と格子叩きの痕跡が残り、B説の手法が中世において確かに存在することを示している。」とされている。今回の調査例では10枚に1枚程度で布目が存在する。ただし、凸型成形台上で平瓦凸面への格子叩きはなく、四周を切り揃える凹型調整台上で一枚ずつ凹面に無文のタタキを施している点が異なっているが、その傍証となる瓦群となろう。山崎氏が言われるB説については、東 洋一「平瓦制作における中世の技術革新について」『研究紀要』第1号（財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1995年）を参照されたい。また、凸型成形台積み重ね技法段階に併行して「瓦当貼り付け式」に変化する軒平瓦凹面に布目を持つ瓦が多いことについては、東 洋一「平瓦制作における中世の技術革新について（第2部）」『研究紀要』第3号（財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年）などを参照されたいが、今回出土した「瓦当貼り付け式」軒平瓦凹面には、鹿苑寺（金閣寺）出土例に比べて布目が多く、瓦当部の剥離が少ないことを踏まえると、「瓦当貼り付け式」のすべてが半乾燥後の平瓦部に瓦当となる粘土を新たに継ぎ足していたかについては、再考の余地があるかもしれない。

参考文献

- 鈴木廣司他『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1978年
- 石井 望他『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1978年
- 前田義明他『特別史跡特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査報告書』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1997年
- 浦林亮次「瓦の歴史」『建築史研究28』建築史研究会、1960年
- 佐川正俊「鎌倉時代の軒平瓦の編年的研究」『文化財論叢』同朋社、1995年
- 法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝・瓦』小学館、1992年
- 『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』同志社大学校地学術調査委員会、1977年

5. まとめ

調査地周辺は史跡・名勝嵐山内であったが、開発も少なく立会調査もまれな地域であった。しかし、今回の調査によって、香巖院建物跡や鎌倉時代から室町時代の遺構面を検出できた。K・D区から検出した雨落溝内法寸法から建物の平面形を復元すると北側に食い違いがあるものの、東西内法19.5m、南北長軸内法17.5m、南北短軸内法16mで、やや東西に長い方形に復元することができる。しかし、礎石抜き取り穴の可能性のある土坑群や礎石の多くは削平を受けているため欠落しており、正確な柱間寸法は明確でない。しかし、D区で検出した南北に並ぶ柱穴195・200・203によって、7尺前後を基準に割り付けられていた可能性がある。また、雨落溝間の内法がほぼ0.5mの倍数になっている。参考として雨落溝15の延石の柄穴が1mと1.05m間隔で開いていることからすれば、2～2.1m前後を基準にしていた可能性もある。

瓦や塼が多量に出土していることから、本瓦葺塼敷建物が想定できる。他の調査区で室町時代の瓦をほとんど検出していないことや、東に向かって眺望が開ける最奥の高所に位置することから、香巖院本堂もしくは方丈などに類する建物が想定できる。雨落溝15の延石西に残存する再建時の可能性が高い縁の束石と考えられる礎石があるため禅宗特有の方形裳腰付塼敷基壇建物であったのか、床を張った和様の方丈・客殿などであったのかは確定できない。しかし、延石を検出した東側を正面と考えると、本瓦葺きで東西方向に長いことや塼が多く出土していることから、塔頭寺院の中心建物である昭堂・開山堂に比定でき、西側もしくは北側の長軸の空間が統合されて1棟の建物になっていた可能性がある。また、応仁・文明の乱前の『蔭涼軒日録』には、將軍義政の香巖院への恒例の御成を毎回記録しており、香巖院の建物配置の一端を知る一連の記事がある。その一例として、寛正六年（1465）五月十五日条に「奉報、香巖院御成并談義之事也。御成。先昭堂而御焼香。於方丈御齋。遂御談義。還御次。西山桂山水勝概。兩所被御歴覽」とある。このことから塔頭であることを示す開山を祀る「昭堂」や、付近に「方丈」が付属していたことがわかる。また、「御齋」の後には「山水」や「西山」（背後の小倉山）を愛でることが通例になっていたようである。これより前の寛正四年三月二十九日の御成では、その表現の後半が「先於昭堂御焼香。次本坊御齋。以後泉水御覧」となっており、「方丈」を「本坊」とも呼んでいた可能性が高く、また、J西区で検出した庭石がここにいう「泉水」に該当する可能性がある。ただし、これらの記事は1467年の応仁・文明の乱前の記事であり、応仁・文明の乱後の「香巖院御喝食御所」時代の記事には「昭堂・方丈」もしくは「本坊」の記事はまったく見当たらず、「御喝食御所様」との「御対面」が主な記事で「南縁」から出る「客殿」（『蔭涼軒日録』長享三年（1488）三月二十四日など）の記事だけとなることから、後に述べるように応仁・文明の乱で一度焼亡している可能性がある。

雨落溝から出土した瓦からは、明德三年（1392）に洪川幸子が亡くなっていることや、応永五年（1398）に亡くなった足利義満の兄で、夢窓国師の孫弟子にあたる栢庭清祖が香巖院開山となっているので、14世紀末の瓦に遡る可能性があるが、少なくとも嵯峨に香巖院が建立されていることが確実な義量が参拝した応永二十八年（1421）以前に建立されていたことは明らか²⁾であろう。足利氏

が関与した応永年間（1394～1428）の他の関連寺院出土瓦との年代観とも矛盾しない。今回出土した軒平瓦は「瓦当貼り付け式」の「半截菊花唐草文」である。この瓦当製作技法と瓦当文様は足利氏所縁の鹿苑寺（金閣寺）北山殿・相国寺・天龍寺・臨川寺などから出土しているだけでなく、足利氏発祥の地である栃木県足利市饒阿寺・樺崎寺などからも出土しており、足利氏との結びつきの深さを物語っている³⁾。

以上によって『応永鈞命図』に描かれた位置と出土瓦から、検出した遺構は香巖院の建物の一部であることが明らかである。しかし、香巖院建物雨落溝から内側には焼け瓦が詰まった土坑を除いて瓦散布地がなく削平を受けており建物復元まで至らなかった。また、出土瓦はほとんどが火を受けており、建物は焼亡している。J区一带に認められる大規模な土木事業である黄褐色系盛土の中に15世紀半ばの土器溜や焼け瓦が含まれていたことを踏まえるならば、焼亡期は応仁・文明の乱も含めて15世紀半ば以前ということになる。十一代將軍義澄となる旭山清晃が香巖院院主に就任するのは文明十九年（1487）である。また、『蔭涼軒日録』に「長享二年（1488）八月二十一日。今日吉日。香巖院造立。材木摠色取之。」とあることから、応仁・文明の乱で焼亡した香巖院再建と受け取れる記事が残っている。先に挙げた香巖院御喝食御所の「客殿」が「昭堂・方丈」焼亡跡に再建された可能性がある。

なお、J区から鎌倉時代から室町時代にかけての溝・柱穴・礎石・土坑・路面などを検出したが、J中央区から鎌倉時代前半の13世紀前半の軒瓦が出土したことは、調査地東が藤原定家・為家の小倉山荘推定地であることを踏まえるならば、鎌倉時代中期の後嵯峨上皇の龜山殿造営以前から上嵯峨地域の再開発が進んだことを示しており興味深い。また、香巖院雨落溝の方位が真北から西に約10°、J区の礎石列が13.5°傾いているので、嵯峨野条里の関連が指摘できる。また、図16に明らかなように、調査地前の南北方向の道は清凉寺東門から西に延びて調査地前で南側の二

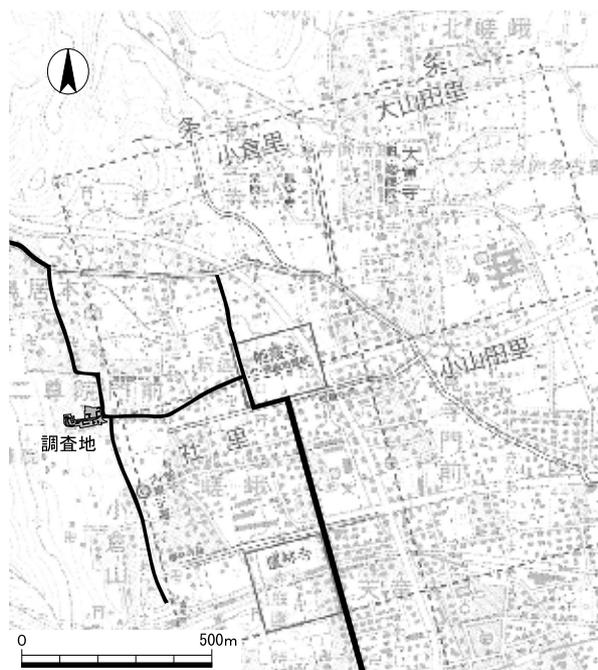


図16 嵯峨条里と愛宕参詣道（1：20,000）
山田邦和『日本中世の首都と王権都市』（文理閣）図89に加筆

尊院と分かれるT字路となっているが、この道路は平安時代から貴賤の信仰を集めた清凉寺釈迦堂を経て香巖院前で北に曲がり愛宕山へ至る愛宕街道巡礼路となっている。また、『応永鈞命図』には、参詣道に沿って門前町を示す「在家」と書かれた箇所が多く、道沿いに設けたF・G区などで検出した時期不明とした柱穴なども町屋を示す遺構であると想定することも可能である。また、この道は嵯峨野条里一条小倉里最西端と一致し、清凉寺西門から香巖院までの東西道が一条小倉里最南端・一条社里最北端の境とほぼ一致している⁴⁾。今回検出した路面181は、室町時代の『応永鈞命図』に描かれた香巖院広場か、もしくは

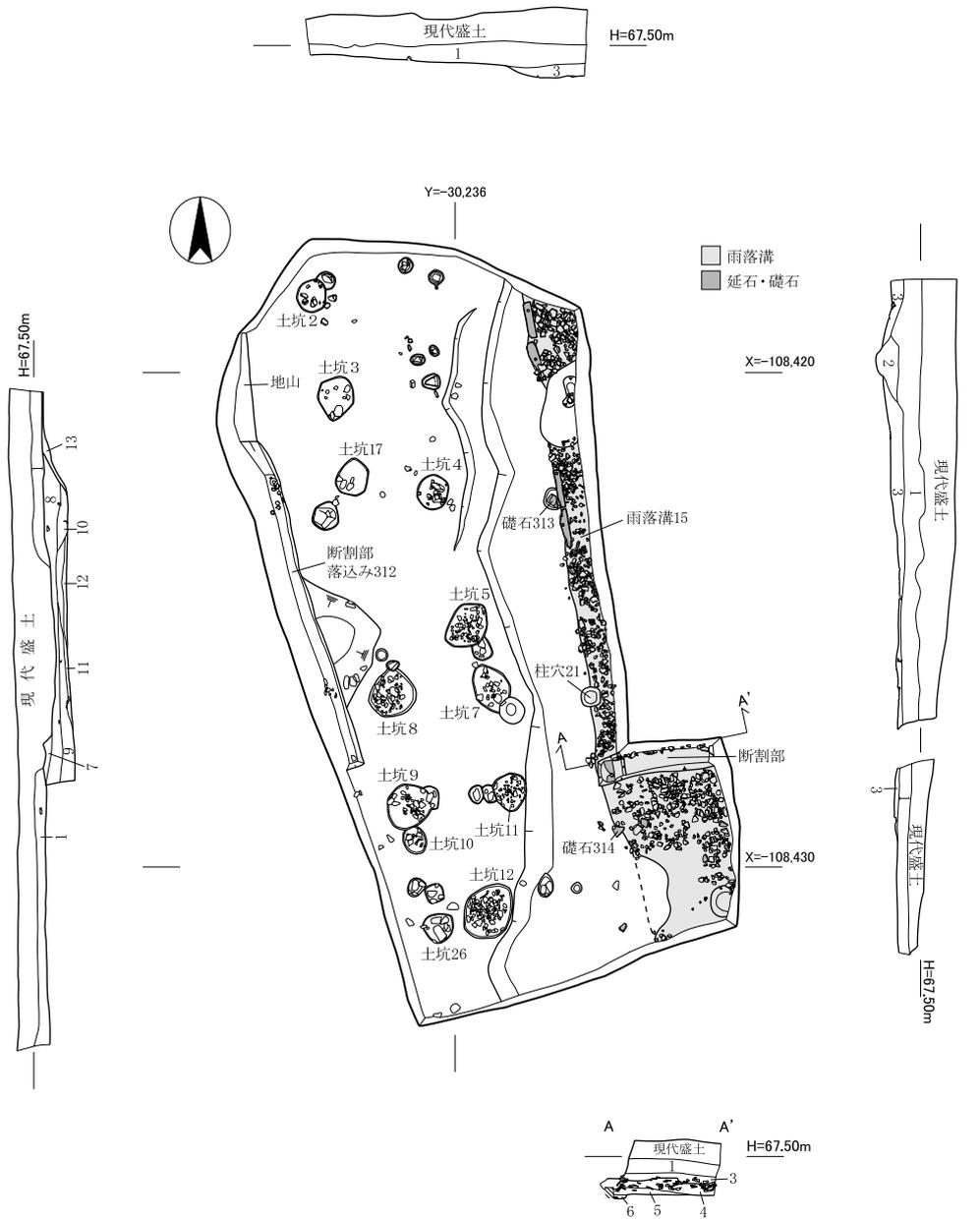
は愛宕街道の路面に該当する可能性もある。

調査に際しては町内会長の秦賢二氏をはじめ、ご町内の山崎紘一氏・長谷川章一氏に多大なるお世話になった。瓦に関しては浅田製瓦工場の浅田晶久氏、庭石については重森庭園設計研究室の重森千青氏、土器については平尾政幸氏のご教授を得た。

註

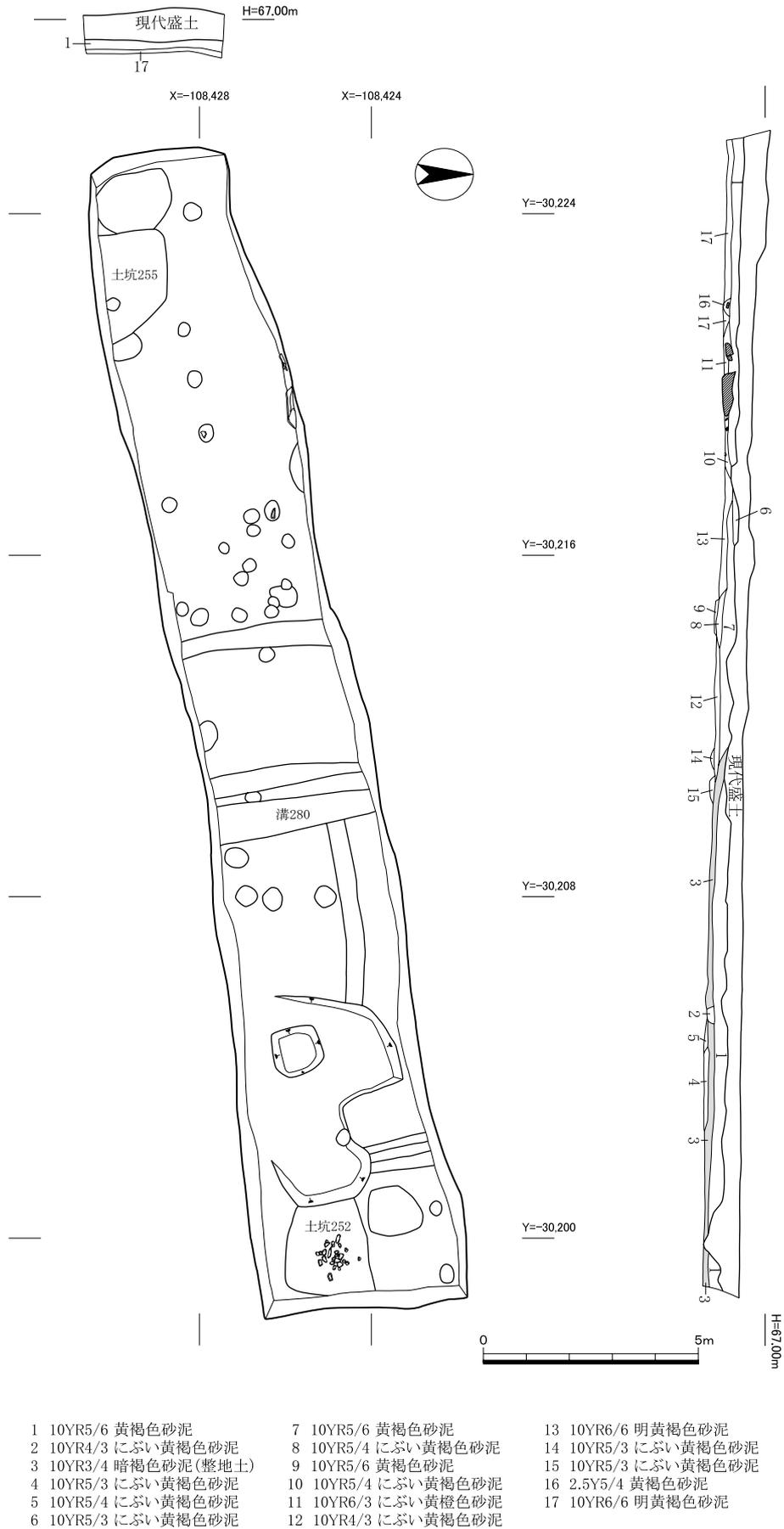
- 1) 川上 貢『禅院の建築・新訂』（中央公論美術出版、2005年）に収められた各塔頭寺院の昭堂図面を参照。特に夢窓国師の開山堂である臨川寺三合院照堂・天龍寺開山塔雲居庵昭堂平面図参照。
- 2) 応永十五年（1408）六月二十五日に義持が等持院で渋川幸子の忌辰仏事を行っている点が気懸かりとなる（「一華東漸和尚龍石藁」『大日本史料』七編之十収録、東京大学史料編纂所）。また、幸子が生前から菩提寺として定めていたかも不明である。
- 3) 山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所、2000年。山崎信二氏『瓦が語る日本史』吉川弘文館、2012年。その他、鶴岡八幡宮（鶴岡八幡宮発掘調査団『鶴岡八幡宮発掘の記録』かまくら春秋社、1980年）や、六波羅探題攻めの時、篠山から足利尊氏が立ち寄り戦勝を祈願したことから、以後足利将軍家から手厚い庇護を受けたとされる大原野勝持寺旧境内から類似の軒瓦が出土している（南孝雄『勝持寺旧境内』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年）。また、足利市の鏝阿寺・樺崎寺は、足立佳代『鏝阿寺本堂調査報告書』足利市教育委員会、2011年、大澤伸啓『樺崎寺跡』同成社、2010年参照。
- 4) 山田邦和『日本中世の首都と王権都市』文里閣、2012年

版 圖



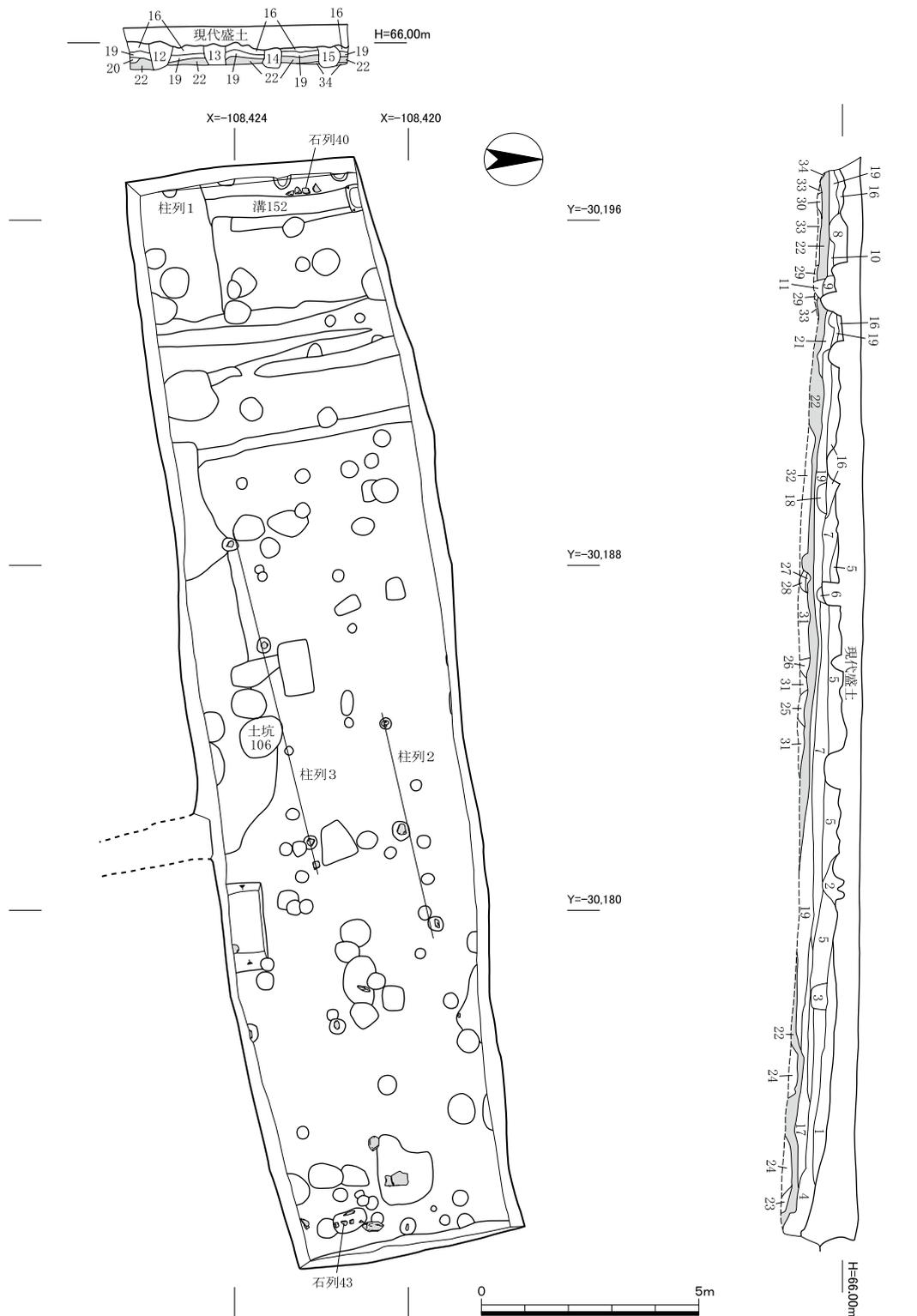
- 1 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 炭・焼瓦片少量含む(近世客土)
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 炭・焼土少量含む(近世客土)
- 3 10YR5/6黄褐色砂泥
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 瓦片多量含む(雨落溝15)
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥(雨落溝15)
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(延石埋土)
- 7 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 8 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 9 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 やや粘質 土師器関係含む
- 10 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 土師片・瓦器片・陶器片少量含む (落込み312)
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 12 10YR4/6褐色砂礫
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 上面に土師片・炭多量含む

K区遺構実測図 (1 : 150)



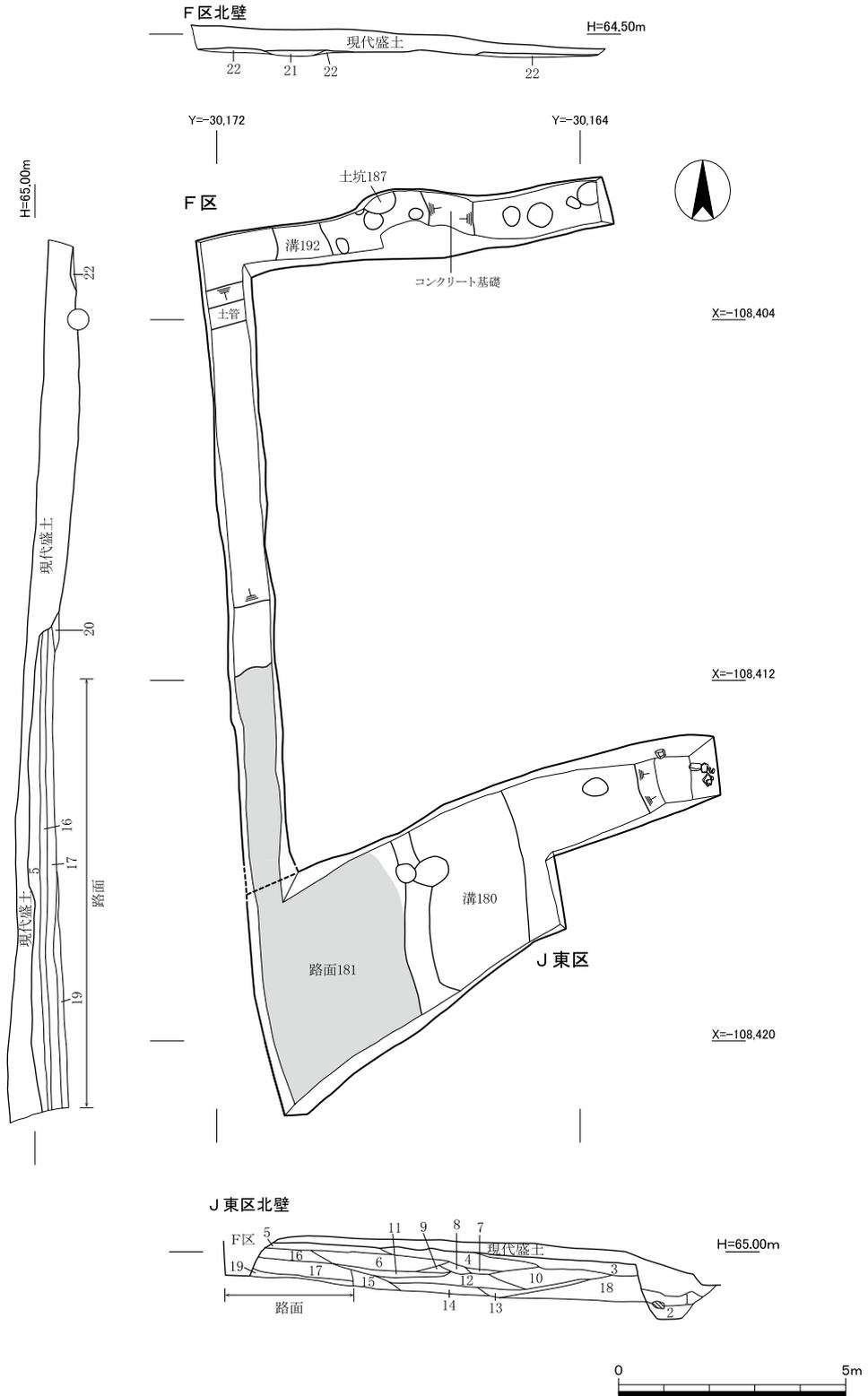
J 西区遺構実測図 (1 : 150)

図版 4
遺構



- | | | |
|-------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 1 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 | 13 10YR5/6 黄褐色砂泥(柱穴162) | 25 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥 | 14 10YR5/6 黄褐色砂泥(柱穴310) | 26 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 |
| 3 10YR5/6 黄褐色砂泥 | 15 10YR5/6 黄褐色砂泥(柱穴311) | 27 10YR4/6 褐色砂泥 |
| 4 10YR4/6 褐色砂泥 | 16 10YR5/8 黄褐色砂泥 | 28 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 5 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥 | 17 2.5Y6/6 明黄褐色砂泥 | 29 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 18 10YR6/6~6/8 明黄褐色砂泥 | 30 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(溝152) |
| 7 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥 | 19 10YR4/4 褐色砂泥 | 31 10YR7/6 明黄褐色砂泥 |
| 8 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 20 10YR4/6 褐色砂泥 | 32 10YR7/8 黄橙色砂泥 |
| 9 10YR4/4 褐色砂泥 | 21 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 | 33 10YR6/8 明黄褐色砂泥 |
| 10 10YR5/8 黄褐色砂泥 | 22 10YR3/4 暗褐色砂泥(整地土) | 34 10YR6/8 明黄褐色砂泥 |
| 11 10YR5/6 黄褐色砂泥 | 23 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 | |
| 12 10YR5/6 黄褐色砂泥(柱穴309) | 24 10YR4/6 褐色砂泥 | |

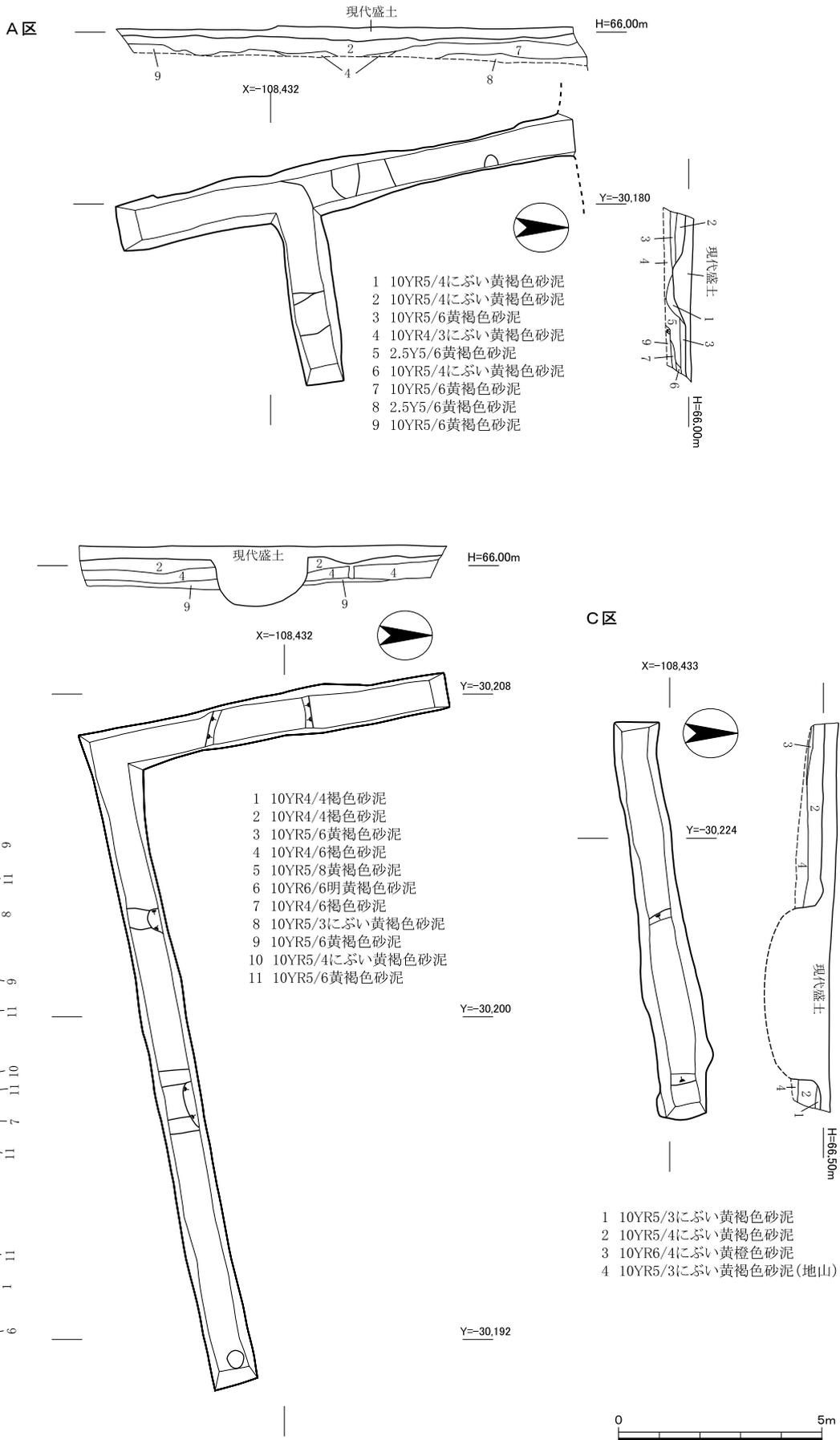
J 中央区遺構実測図 (1 : 150)



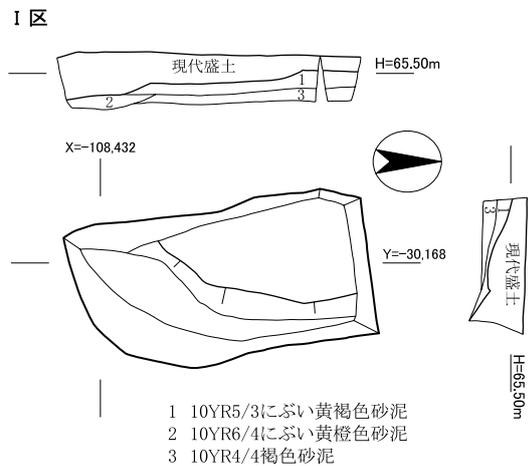
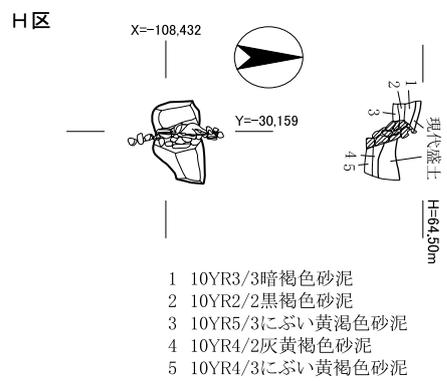
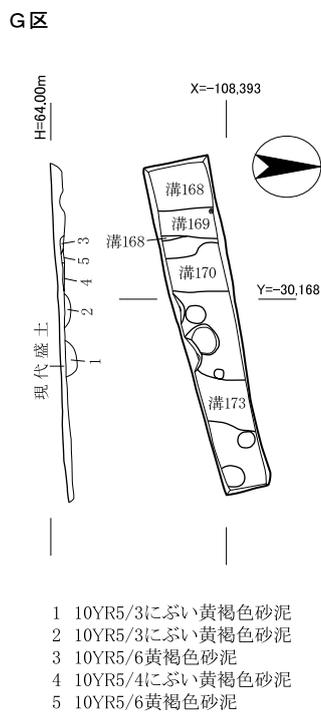
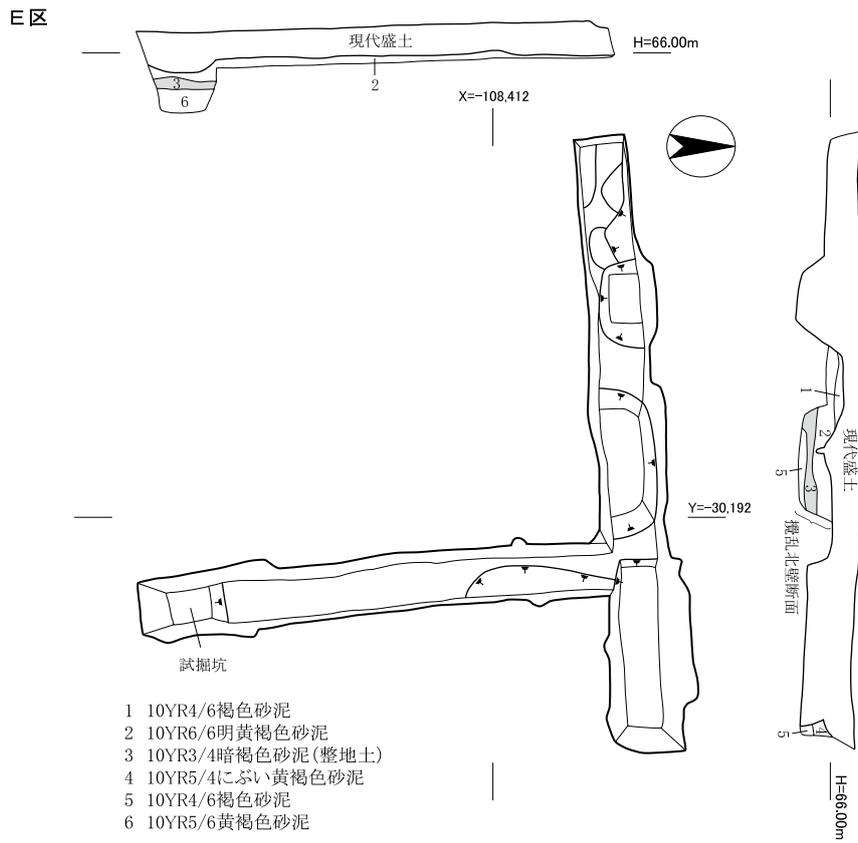
- | | | |
|------------------------|---------------------------|---------------------|
| 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 9 7.5YR5/4 にぶい褐色砂泥 | 17 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 | 10 10YR4/4 褐色砂泥 | 18 10YR5/6 黄褐色砂泥 |
| 3 10YR5/3~5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 19 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 12 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 | 20 10YR5/6 黄褐色砂泥 |
| 5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 | 13 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 21 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 |
| 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 14 10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫(溝180) | 22 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 15 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 | |
| 8 10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥 | 16 10YR4/4 褐色砂泥 | |

F・J東区遺構実測図(1:150)

図版6
遺構



A・B・C区遺構実測図 (1:150)



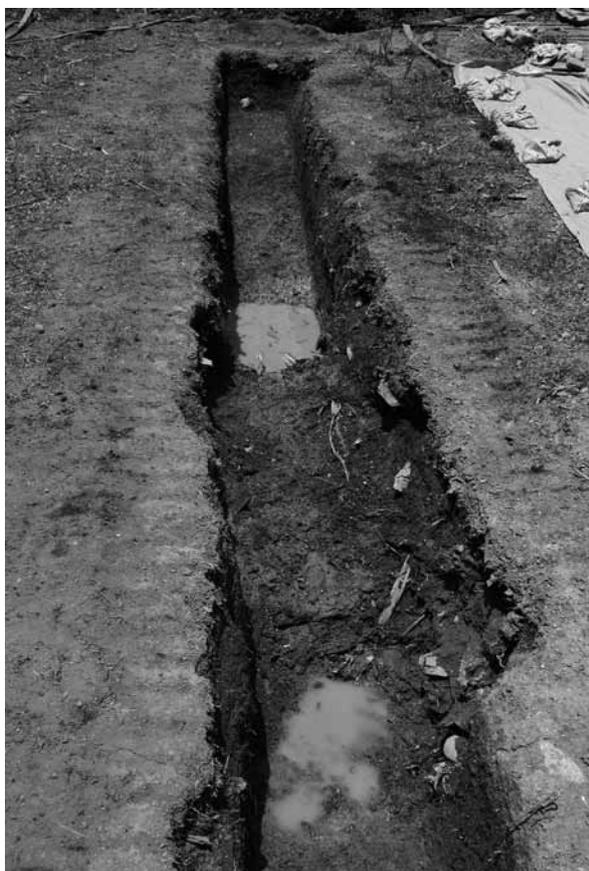
E・G・H・I区遺構実測図(1:150)



1 A区全景 (南西から)



2 B区全景 (南西から)



3 C区全景 (東から)



4 D区全景 (北西から)



1 D拡張区全景（北西から）



2 D区雨落溝220（東から）



1 E区全景（北東から）



2 F区北半（西から）



3 F区南半（南から）



1 G区全景（西から）



2 H区全景（南から）



3 I区全景（北から）



4 J西区全景（西から）



1 J 中央区全景（東から）



2 J 西区北壁庭石検出状況（南から）



3 J 東区・F区路面181検出状況（南から）



1 K区全景（南から）



2 K区西壁断割部落込み312（南から）



3 K区北東隅雨落溝15延石・瓦検出状況（北西から）



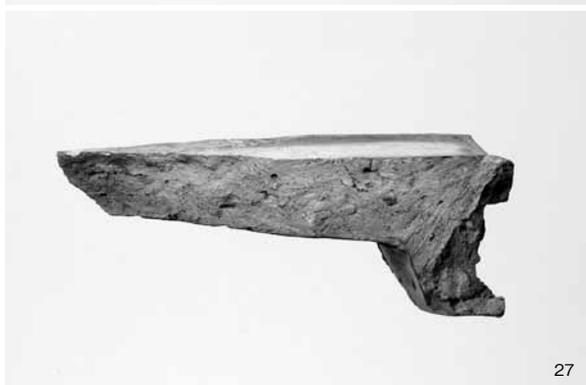
4 K区雨落溝15断割部延石・瓦検出状況（南西から）



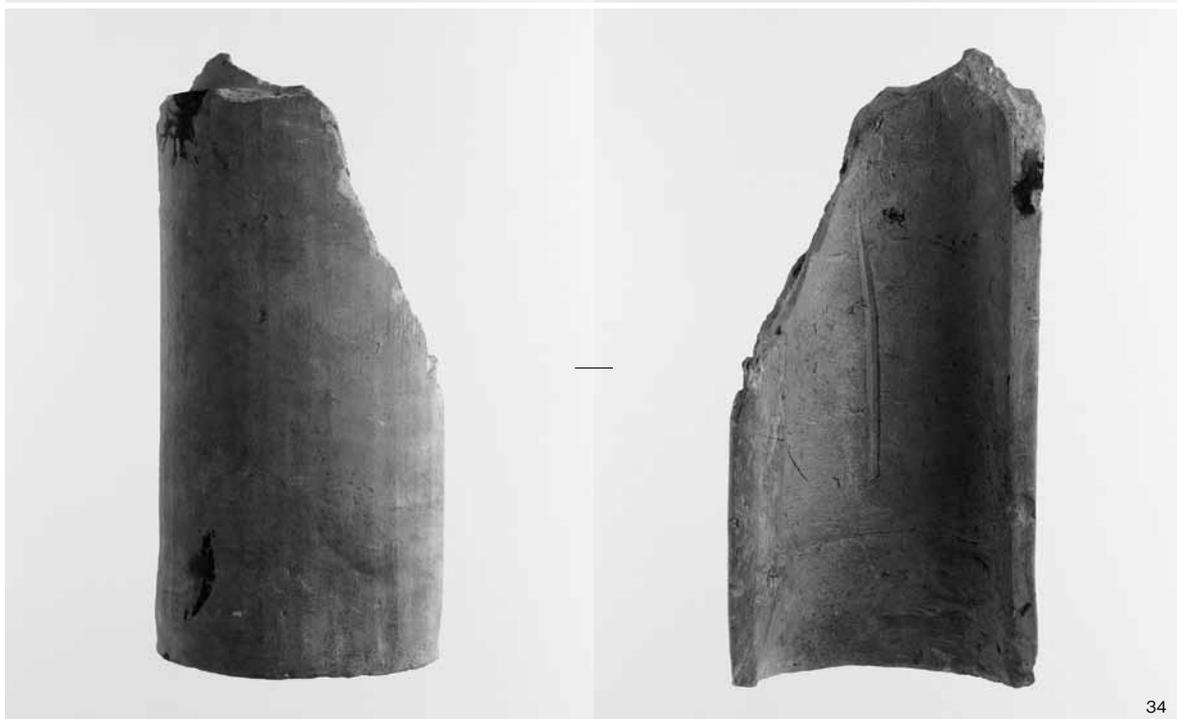
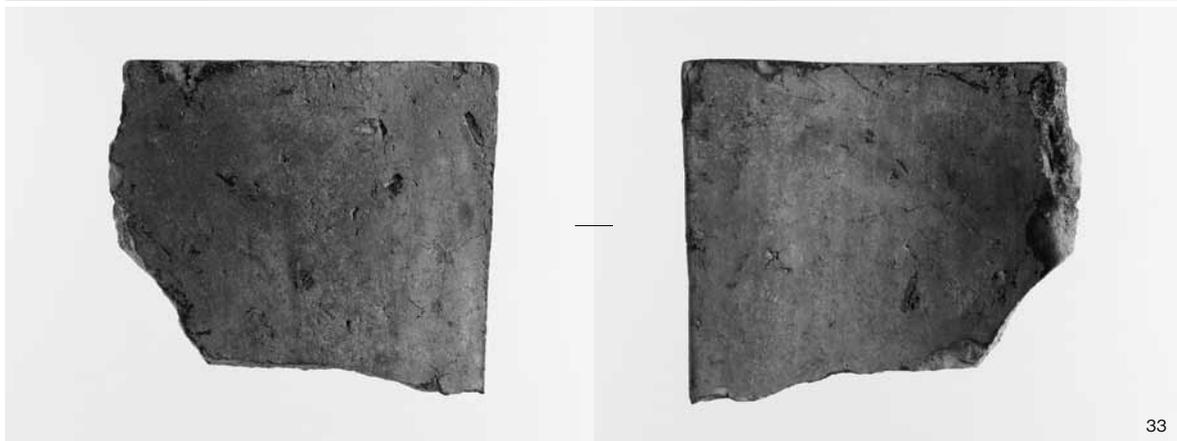
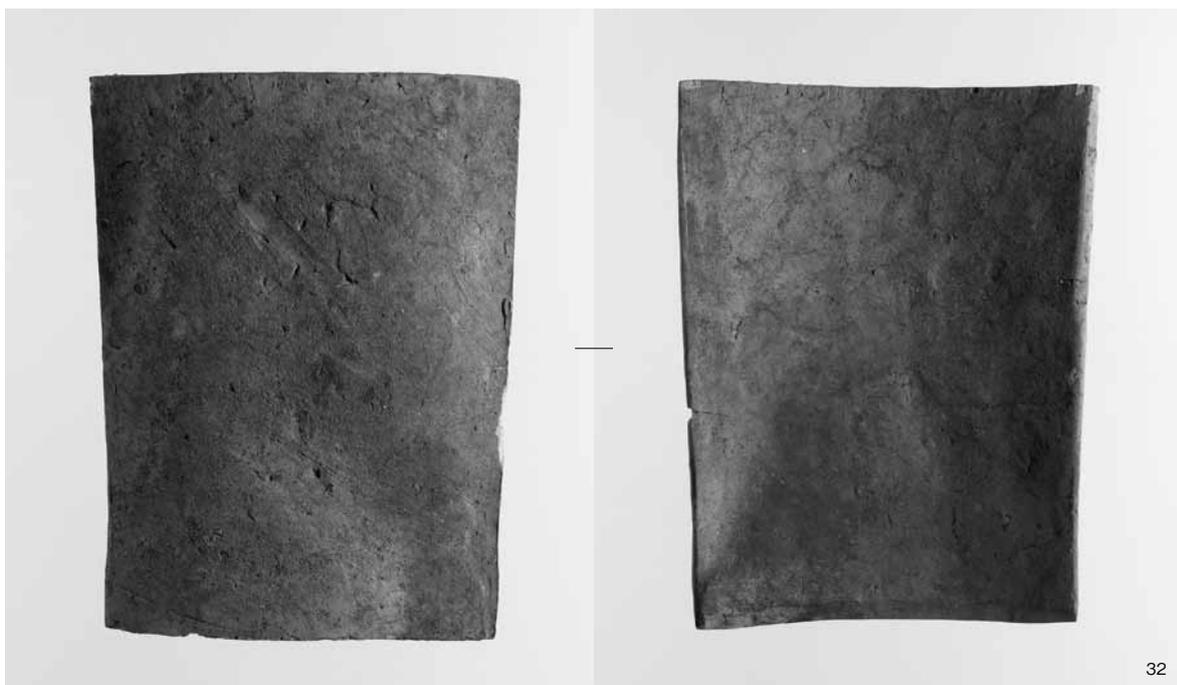
5 K区雨落溝15断割部延石検出状況（東から）



K区落込み312出土土器



J 中央区土坑106・土器溜308出土土器、雨落溝出土瓦類



雨落溝出土瓦類

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-7							
編著者名	東 洋一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしうきやうく 京都市右京区 さがにそんいんもんぜん 嵯峨二尊院門前 おうじょういんちやう 往生院町	26100	A809	35度 01分 20秒	135度 40分 09秒	2012年6月 12日～2012 年8月1日	765.3㎡	分譲住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 嵐山	史跡・ 名勝	鎌倉時代～ 室町時代前期	路面、石列、溝、 土坑、柱穴、落込 み	土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦類		室町時代の香厳院 に関連する建物の 雨落溝を検出した。		
		室町時代	雨落溝、溝、土坑、 土器溜	土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦類				
		時期不明	溝、土坑、柱穴、 礎石、落込み	土師器、須恵器、瓦器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦類、金 属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-7

史跡・名勝 嵐山

発行日 2012年10月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961